

# 「魂廻（たまる〜ぷ）」

## 【登場人物】

騎士（A）

お頭

道士

健弘

青年

案内人

※以下サブキャラは兼ね役で

娘、騎士B〜C、飼い主、犬、馬、教会の人

テツ、キンタ、ゲンゾウ、町娘、侍

老子、ボス、側近、悪党1〜2、食堂のおばちゃん、チンピラ1〜3、

黒子、弟子1〜2、女医、看護婦

母、犬

アンドロイド1〜2、仲間兵、刺客1〜2

【1幕】

娘 「いや！離してください！」

明転。

舞台は町の大通り。娘と騎士Bがいる。騎士Bが娘の腕を掴んでいる。

ナレーション 『時は15世紀後半。今この地ヨーロッパでは魔女狩りが盛んに行われていた』

騎士B 「こい！お前には教会から魔女の疑いがかけられているのだ！」

娘 「そんな…何を根拠に…！私は魔女なんかじゃない！」

騎士B 「教会に疑惑を持たれることこそが根拠なのだ。お前達魔女は呪われている！一刻も早く教会に連れて行かなければ！」

娘 「私は呪われてなんてない！」

騎士B 「魔女の言葉などに耳を傾げるか！お前らに関わる者は皆不幸になるのだ！」

騎士A 「やめろ！その娘から手を離せ！」

騎士Aが下手から出てくる。

騎士B 「お前は…嫌われ者の騎士、マー・ダーヤか…！」

騎士A 「女性に対しそのような乱暴な行動、騎士道に反する！」

騎士B 「騎士道、騎士道うるさいゆえに皆から嫌われている騎士、マー・ダーヤか…！」

娘 「あなた、嫌われているの？」

騎士A 「私は、嫌われている。しかし私はいくら嫌われようと、自分の騎士道を曲げる気はない！」

娘 「騎士様…」

騎士B 「お前も騎士なら昨日の集会で聞かされただろう。この者が魔女だとされたことを」

騎士A 「そんなことは知らん…私はその集会に呼ばれなかったからな」

騎士B 「そういうことか。やはり嫌われているな」

騎士A 「彼女が魔女だと？馬鹿馬鹿しい。ただの華奢な娘ではないか。私は自分の目を信じる」

娘 「騎士様…」

騎士B 「お前…その者に関わるというのなら、お前も呪われお前に不幸が降り注ぐぞ！」

騎士A 「私はそんな目に見えないものは信用しない。私は私の騎士道に、従うまでだ（娘の腕を掴む）」

騎士B 「馬鹿な！教会の加護が入った手袋もせず、素手で魔女に触るだど！」

騎士A 「彼女は魔女ではない。私を不幸にできるものなら、不幸にしてみろ！」

娘 「騎士様…！」

声（裏から） 「下の人危ない！」

植木鉢が上から降ってきて騎士Aの頭に当たる（黒子が植木鉢を持って騎士Aに当てる）。

娘 「…大丈夫ですか？」

騎士A 「…大丈夫だ。私は騎士道を貫くために日々鍛錬しているのでな。彼女は魔女じゃない。不幸にできるものならしてみろ！（娘の腕を掴む）」

上手から犬とその飼い主が出てくる。犬、騎士Aに噛みつく。

犬 「がるるるる!!」

飼い主 「どうしたジョン！？人を噛んだことなんて一度も無いのに！離しなさいジョン！」

飼い主、騎士Aから犬を引き剥がし、そのまま下手へはける。

騎士A 「…彼女は魔女じゃない！（娘の腕を掴む）」

下手から2羽の鳥が飛んでくるが、突然騎士Aの体を突き出し最終的に鳥が付いている棒で叩く（黒子で表現する）。

娘 「騎士様…私、魔女かもしれない！呪われてるよ！」

騎士A 「いやいやいや！違う！今の出来事は全て偶然だ！キミは魔女なんかじゃない！私の騎士道にかけて、キミを守る！（娘の腕を掴む）」

声（裏から） 「馬が逃げたぞー！」

下手から『バカラバカラ』という音と共に馬が出てきて、騎士Aに体当たりし、そのまま上手にはけていく。

娘 「やっぱり魔女よ！」

騎士A 「違う！（娘の腕を掴む）」

声（裏から） 「馬がまたそっちに行ったぞー！」

飼い主（裏から） 「ジョン！どこに行くんだ！」

上手から馬、下手から犬が出てきて、騎士Aにコンビネーションアタックをして、そのままはけていく。

騎士B 「動物への嫌われ方尋常じゃないな…！」

娘 「怖い…！」

騎士A 「大丈夫！（娘の腕を掴む）」

声（裏から） 「火事だー！火事だぞー！そして馬がー！」

飼い主（裏から） 「何だと？何番街が燃えているんだ？ジョンまたかー！」

馬・犬・鳥が下手から出てきて、騎士Aの周りを回る。

騎士B 「…お前の家は何番街だ？」

娘 「怖い…！」

声（裏から） 「5番街で火事だー！」

※声と同時に動物達が騎士Aを攻撃し、真ん中からはけていく。

騎士A 「（起き上がり）私の家は、4番街だ！」

声（裏から） 「4番街に火が移ったー！」

娘 「怖い…！怖い…！」

騎士A 「大丈夫！あなたは呪われてなんかいない！（娘の腕を掴む）」

娘 「やめて！触らないで！（騎士Aの手を振り払う）」

騎士A 「…え？」

娘 「なんで…なんでそんな目に合っているのに私に構うの…？怖い…！」

騎士B 「そ、そうだ！異常だぞお前！何か、何か企んでいるのか！？」

騎士A 「いや私はただ私の騎士道に従って、」

娘 「騎士道…？それだけで…？い、意味が分からない…あなた…何だか怖いよ…！」

騎士B 「そ、そうだ！怖いぞお前…！もしや…お前が呪われているのではないか！？」

騎士A 「は？いや、何を言ってる、」

娘 「た、確かにあの不幸の量は異常だった…！あ、あなたが呪われているの…？」

騎士A 「いやいやちよっと、」

騎士B 「そうか！呪われているから俺達騎士もお前のことを嫌うのか！」

騎士A 「私が嫌われているのはあくまで自分のせいだ…！こんな悲しいこと自分で言わせるな！」

娘 「この人（騎士B）は私に触ってもなんともないもの！」

騎士A 「いやそれは加護のある手袋をしているからってことも、」

騎士B 「こんな手袋気休めに過ぎん！」

騎士A 「えー…」

騎士B 「もしやお前が…お前が魔女なのではないのか…？」

騎士A 「はあ？」

騎士B 「騎士マー・ダーヤ。貴様を魔女の容疑で拘束する！」

騎士A 「いやいやいや！そもそも私は男だよ！？」

真ん中から騎士C・教会の人が出てきて、騎士Aを拘束し、張り付けにする。

騎士A 「なぜだ！私はただその娘を助けようとしただけなのに！何が起ころうと騎士道を貫き通そうとしただけなのに！」

娘 「怖い…あの人が怖い…」

娘がはげ、犬が出てくる。

教会の人 「騎士マー・ダーヤよ。人がなぜ魔女を恐れるか、分かるか？」

騎士A 「何？」

教会の人 「人は自分の理解できないこと、自分とは違うものを恐れ、畏怖する。そなたのそのしつこ過ぎた騎士道精神、正義心もまた畏怖されたのだ。そなたは皆にとって、魔女と同じだったのだ」

騎士B 「燃やせ！火あぶりにしろ！」

騎士C 「燃やせ！燃やせ！」 犬 「ワンワン！ワンワン！」

騎士A 「やめろ！私はジャンヌダルクか！」

教会の人 「そなたは…ジャンヌダルクではない」

騎士A 「いや知ってるけど！真面目に返すな！」

騎士B 「俺達とは違う存在を燃やせ！」

騎士C 「燃やせ！燃やせ！」 犬 「ワンワン！ワンワン！」

騎士A 「ふざけるな！お前達！この状況がおかしいとは思わないのか！おい！」  
教会の人 「無駄だ。そもそもそなたは周りから疎まれていたのだから。仲間・友を作ることができなかったのも、そなたの行いが原因なのだから」

騎士A 「くっ…！」

騎士B・C 「燃やせ！燃やせ！」 犬 「ワンワン！ワンワン！」

騎士A 「ふざけるな…！これが、これが騎士道をまっとうしようとした者の末路なのか！」

騎士B・C 「燃やせ！燃やせ！」 犬 「ワンワン！ワンワン！」

騎士A 「ふざけるな…！！」

騎士A、叫んだ後、がくつと倒れる。騎士A以外、全員はける。

真ん中から案内人が出てくる。

【魂の間1】

舞台には騎士（下手側）と案内人（真ん中）。起き上がる騎士。

騎士「ここは…？私はいったい…？」

案内人「御機嫌よう、人の子よ。いや、気分はあまり良くないかな？」

騎士「あなたは、誰だ…？」

案内人「私は名も無き死神…ジャックと言う」

騎士「名前あるではないか！」

案内人「失礼、冗談だ。私は、死神ではない」

騎士「そっちのこと？じゃあ名前はあるのか」

案内人「私にとって名前等どうでも良いことだ。私は人間ではない、魂の案内人なのだから」

騎士「魂の案内人…？」

案内人「お前の魂を導く存在だ」

騎士「…ということはやはり、私は死んだのか？」

案内人「そう、お前は死んだ。ただしそれは肉体の話だ。お前の魂は…まだ死んではいない」

騎士「え？」

案内人「お前の魂の旅はまだ終わらない。お前の魂は、次の人生へと進むのだ」

騎士「まさか…生まれ変われるというのか!？」

案内人「人間の魂は皆生まれ変わりを繰り返している。お前もその1つに過ぎん」

騎士「なんと…！」

案内人「勿論、今あるお前の自我は無くなるがな。しかし、魂に刻まれた記憶は無くならない。お前は自分の魂に、何を刻む？」

青年（お頭）が上手から出てくる。

騎士「こいつは…？」

案内人「…誰だお前はー!？（顔を青年に向ける）お前かーよく来た」

騎士「ただびっくりさせるのやめてもらえる？」

案内人「この人間は次のお前の姿。つまりお前の魂が生まれ変わる姿、転生者だ」

騎士「この者が…次の私」

案内人「さあ、まっさらなこの転生者にお前の魂、お前の人生で得た教訓を刻むのだ」

騎士「教訓か…良いだろう。よく聞くが良い。私は私の騎士道を、私の信じる正義を貫き、人生を終えた。しかしそれがあの理不尽な結末だ！私は分からなくなつた！

騎士道というものを！正義というものを！

青年「騎士道…正義…分らない」

騎士「いや…違う。私は、自分の正義で報われたのだ…！そうさ、少しでも良い、

正義に見返りが欲しかったのだ…！まさか死んだ後に気付くとはな…ふふ、情けない」

案内人「この場では魂がむき出した。ここで初めて気付くこともある」

騎士「…そうか。ならば次の私よ！覚えておくが良い！報われないものなど、純粋な正

義など…クソくらえだ！」

青年「正義など…クソくらえ」

騎士「そして次の人生では…友を、仲間を作るのだ！どんな時でも共に立ち向かってくれる、そんな仲間を作れ…！そして、大切にすることだ…！」

青年「友…頼れる仲間…」

騎士「あとあの…動物はけっこうコワイ！犬とか、鳥とか！」

青年「動物は…コワイ」

騎士「これが私の…魂の叫びだ！」

案内人「最後のやついる？」

暗転。↓OP映像

【2幕】

テツ「お頭、お頭」

明転。

舞台は山賊団のアジト。お頭、テツ、ゲンゾウがいる。

お頭「ああ？」

テツ「いえ、ぼーっとしてどうしやした？」

お頭「ああいや、昔の夢？みたいなのが…まあなんでもねえ。そんなことよりテツ、商人から言われたあの町娘はきちんと攫ってこれたのか？」

テツ「へい。無事キンタのやつが攫ってきたようです」

ナレーション『慶長15年江戸初期、江戸と相模を結ぶ山道の1つは、極悪非道の三角山賊団によって支配されていた』

テツ「おい！女をここに入れる！」

上手からキンタと縄に縛られた町娘が入ってくる。

キンタ「こいつです、お頭」

お頭「ご苦労だキンタ。おい女、我が三角山賊団のアジトはどうかかな？」

町娘「…ふん！クサイクサイ！とても人の住める所じゃないね！肥溜めの方がましさ！」

キンタ「この女…！キャンキャンキャン犬みたいに喚きやが、(町娘を殴ろうとする)」

テツ「キンタ！犬の話はやめる。お頭は動物が苦手なんだ」

お頭「テツ、今それを言わなくても良い。しかし女。俺は威勢の良い女は嫌いじゃねえが、アホな女は大っ嫌いだ。博打と啖呵は時と場所を選ぶもんだぜ」

町娘「…ふん、悪党が私に説教かい？」

お頭「そうとも、俺様は悪党だ。それも大の付く、な。そして俺の頼れる仲間達も皆大悪党ときたもんだ」

テツ・キンタ「へへ…」

お頭「せっかくだ。テツ。俺達の恐ろしさ、しっかりとこの女に教えてやれ」

テツ「へい、お頭。まずはお前を攫った男、キンタ、通称切り裂きのキンタだ。目にも止まらぬ2本の短刀で相手は抵抗する間もなく斬り刻まれちまう、危ない男さ」

※キンタ、→台詞に合わせて激しく動く。



テツ「こつちにいるのは熊殺しのゲンゾウ。普段は冷静だが一度火が付いたらその凶暴性は止められねえ。もはや人間だけでは飽き足らず、熊にまで手を出した男よ」

※ゲンゾウ、→台詞に合わせて激しく動く。

テツ「お次はこの俺、巨大こん棒のテツ。俺の持つ太く長いこん棒はあらゆる野郎を一撃で戦闘不能にしてきたのだ！（台詞に合わせて激しく動くが、最後は勢い余ってこん棒をお頭に当ててしまう）」

お頭「テツ、お前だけ当たったぞ」

テツ「すいやせん…！そして最後は我がお頭、火縄銃の竹蔵！その銃に狙われちゃったら最期、どんな相手でも無事に朝日は拝めねえのさ！」

キンタ「オイラ達をただの山賊と同じにしない方が良いぜ」

ゲンゾウ「誰であろうと…容赦はしない」

お頭「この間も俺達にたてついた侍どもをボロボロにしてやったばかりだ。後始末はこいつらに任せたが、どうだった？」

テツ「へへへ…！すっかり楽しませてもらいやした」

ゲンゾウ「あいつらの最期の声…よかったなあ」

町娘「酷い…！あんた達には良心つてもんがないのかい！」

お頭「良心ねえ…正義の心つてやつか…そんなもんはクソくらえだ！だからよお、女。

あんまり俺達をなめてると…ケツの穴手突っ込んで奥歯ガタガタ言わすぞ！？」

おお！？」

町娘「これが大悪党…三角山賊団…！」

お頭「おお、おお。少しビビらせ過ぎたか。お詫びとこっちやあなんだが…少し俺達と、

楽しいことでもやろうか？」

町娘「いや…」

テツ「へへへ…お頭、俺達にも楽しませてくだせえよ」

お頭「勿論だ」

テツ「キンタ（手で指示する）」

キンタ「へい！（白箱の中をガサガサする）」

お頭「商人が来るまでまだ時間があるんだあ。たっぷり楽しもうぜ？なあ？」

キンタ「へへへ…（町娘に近づく）」

町娘「いや…いやー…!!」

キンタ、ボードゲームを広げる。

キンタ「さあ、皆で楽しませようぜ…ぼーどげいむ」

お頭・町娘「は？」

キンタ「商人からもらった西洋のぼーどげいむ、5人用だから今までできなかったんすよ  
ねえ。ささ、楽しませようぜ」

お頭「馬鹿なの？」

キンタ「え？」

お頭「今の楽しむってそういうやつじゃないだろ！雰囲氣的にどう考えてもエロい感  
じのやつだったじゃん！」

キンタ「いやいやいやエロいことって…正気ですかお頭？」

お頭「こっちの台詞だよそれ」

キンタ「だってこいつ、女ですぜ？」

お頭「何の問題があるんだよ！」

キンタ「いやいやいやだってオイラ達、衆道じゃないですか」

お頭「は？衆道？」

ナレーション『衆道とは、現代の言葉で、ゲイのことである。以降、ゲイという言葉を使っ  
て進行する』

キンタ「改めて言わせないくださいよーお頭」

お頭「え？」

テツ「そうだなキンタ」

お頭「え？」

ゲンゾウ「確かに俺達は」

お頭「え？」

テツ・ゲンゾウ「ゲイだ」

お頭・町娘「えー！？」

町娘「何この集団！？」

テツ「なんだ女？そんなにゲイの山賊団が珍しいか？ああ？」

町娘「いやけっこう珍しいよ！」

お頭もコクコク頷く。

テツ「いや女さっきので分からなかったのか？俺の異名、巨大こん棒つつうのは下のこ  
となんだぜ？」

お頭・町娘「そうなの！？」

テツ「さっきの、俺の持つ太く長いこん棒はあらゆる野郎を一撃で戦闘不能にしてく  
ってそういうことだから（少し照れながら）」

町娘「知りたくなかったよ！」

テツ「因みにこいつ（ゲンゾウ）の熊殺しという異名も下のことだ」

町娘「熊に手を出した！？人間だけでは飽き足らず！？倫理観とか、色々大丈夫！？」

ゲンゾウ「別に人間とやる方が多い」

町娘「常にそうであってほしいよ」

ゲンゾウ「この前お頭がボロボロにした侍どもも…良い喘ぎ声をしていた」

町娘「さっきの楽しんだってそういうことだったの？」

お頭「俺の知らないところで…」

テツ「お頭のキメ台詞、ケツの穴手突っ込んでっやっ聞く時はいつもゾクゾクしてるぜえ」

ゲンゾウ「…俺もしている」

お頭「俺の脅し文句で興奮してたのお前ら？」

町娘「想像力豊かだなこの人達」

ゲンゾウ「ん？いや、ちよっと待ってくれ」

お頭「何？」

ゲンゾウ「お頭さっきからの物言い、少し確認したいのだが…お頭も、ゲイだよな？」

お頭「え？」

テツ「おい待てゲンゾウ…お頭もそうに決まってるだろ！まさかそんなノンケだなんてそんな裏切りがあるはずねえだろ！ねえお頭？お頭も、こっち側ですよね？（サイコパスな感じで）」

お頭「え？いや、俺は、その…」

テツ・ゲンゾウ・キンタ、お頭に迫ってくる。

キンタ「まさかお頭は、オイラ達と違うんですか？」

ゲンゾウ「そうなのか？俺達と、違うのか？」

テツ「俺達と違って…魔女なのか？」

下手側に張り付けにされている騎士が出てくる。

3人「魔女なのか？」

テツ「違うやつは燃やせ！」

3人「燃やせ！」

お頭「俺は…」

3人「燃やせ！」

お頭「俺は…！」

3人「燃やせ！」

お頭「俺はあ…！」

騎士、はける。

町娘「え？何？ミュージカル？」

3人「お頭？」

お頭「…俺も、ゲイだよ」

3人「お頭〜！」

町娘「いやいやいや！絶対違うでしょうあんた！」

3人「お頭？」

お頭「…ゲイだよ〜」

3人「お頭〜！」

町娘「いやいやいや！手下達の雰囲気は怖くて嘘ついてるだけでしょ？」

お頭「いやいやいや嘘なんて全然ついてませんけど〜？うーんオラ、お前らを見てたら

ムラムラしてきたぞ〜。筋斗雲〜」

町娘「いやいやいや、だってあんた、」

キンタ「いい加減にしる女！さっきからピーピーピー鳥みたいに喚きやが、」

テツ「キンタ！鳥の話はやめる。お頭は動物が苦手なんだ」

お頭「お前達も苦手になりそう…」

テツ「いいか女良く聞け。お頭はこっち側だ。というかどっからどう見てもゲイだろうが！」

お頭「どっからどう見ても？」

町娘「ほらほら〜お頭さん今の発言でなんかすごい複雑そうな顔してるよ」

お頭「…複雑そうな顔は、している！…でもゲイでーす！」

3人「お頭〜！」

町娘「もういいやどうでも」

3人、お頭に近づく。テツ、お頭の太ももを触る。

お頭「うんテツ、太ももを触るな〜」

キンタもお頭のおももを触る。

お頭「両サイドから触るな〜」

ゲンゾウ「キンタ…ほどほどにな」

キンタ、ゲンゾウの横に戻り、2人手を繋ぐ。

お頭 「うん、キミらはすでにデキてるんだね。お頭なのに全然気付かなかった」  
キンタ 「すいやせんこの山賊団、恋愛はご法度でしたか？」

お頭 「お好きにどうぞ」

キンタ 「やったぜ！次はテツさん、だな」

テツ 「ああ（お頭に羨望の眼差しを送る）」

お頭 「うーん？なんだろその眼は？自意識過剰であってくれ」

テツ 「お頭、今夜あつしの巨大こん棒とお頭の火縄銃でやり合いませんか？」

お頭 「もう卑猥な意味にしか聞こえない！不思議！」

侍 「そこまで貴様ら！」

3人 「誰だ！？（コワく）」

お頭 「よくそんな素早く山賊モードに切り替えられるな！」

侍が上手から出てくる。

侍 「拙者は流浪人…町長に頼まれその娘を助けに、そして三角山賊団を潰しに参つた」

お頭 「ああ？つまり、死にきたという訳か」

侍 「なるほど…これは倒すのに苦労しそうだ」

お頭 「ああ。俺達はつえーぞ？」

侍 「いや、そういう意味ではない」

お頭 「え？」

侍 「貴様ら全員…拙者の好みの顔立ちだからだ！」

お頭 「さてはお前もゲイだな！」

町娘 「ホント何この空間」

侍 「しかし受けた依頼はきちんとこなす…覚悟しろ貴様ら」

キンタ 「へっ！やれるもんなら」

ゲンゾウ 「やってみろ」

侍 「いざ！」

侍、キンタ・ゲンゾウの一撃を受け止める。

侍 「ほう、その太刀筋…ゲイか」

お頭 「なんで分かるんだよ」

3人、戦い始めるがだんだんやらしい求愛ダンスみたいになる。

お頭 「どうしたらそうなるんだよ」

侍 「隙有り！（キンタとゲンゾウを斬る）」

キンタ・ゲンゾウ 「ぐわー！（倒れる）」

お頭 「ゲンゾウー！キンターー！」

テツ 「強い…！まさかあの男、最近ここらで噂の侍…！伝説の剣豪マサキか！？」

侍 「否定はせん」

テツ 「攻撃力1100」

侍 「が、安心しろ、殺しはしていない。ただしこの山賊団を潰すため、お頭の命は獲らせてもらおう」

お頭 「上等だ。こんな奴らでも大事な仲間。そいつらが斬られたんだ。受けてたってやるぜ」

テツ 「お頭…！！」

お頭、銃を侍に向け、侍は刀を構えている。お頭、侍の斬撃を数回避ける。その後、お頭が銃を撃つが侍、間一髪でそれを避け、お頭の目の前へ距離をつめる。

お頭 「ちくしょうが…！！」

侍、お頭を斬る。お頭、倒れる。

テツ 「お頭ー！（お頭に近寄る）今すぐ人工呼吸を！」

お頭、必死に首を振る。

テツ 「お頭…照れてるんすね！でも大丈夫です！いつも寝てるお頭に、接吻してやしたから！」

お頭 「何してくれてたんだ!!ぐう…！！（倒れる）」

テツ 「お頭！」

侍 「もう蘇生法も意味は無い。しかしその死に様、悪党としても天晴だった。拙者の中で永遠に覚えておこう。大悪党だが、仲間想いのゲイしかいない山賊団のそのお頭だったと！」

お頭 「そんな感じの覚え方！？ぐう…！！（倒れる）」

テツ 「お頭！お頭…！！お頭は本当に立派な…ゲイでやした！」

お頭 「いや、あの…俺は…ゲイ、じゃ、がくっ（倒れる）」

侍 「最後の言葉、俺はゲイじゃ、覚えておこう」

テツ「お頭ー!!」  
町娘「なんだこれ」

侍と町娘、上手からはける。その後、テツがキンタとゲンゾウを起こし、下手からはける。  
倒れているお頭だけ残る。真ん中から案内人が出てくる。

【魂の間2】

舞台にはお頭（下手側）と案内人（真ん中）。お頭が起き上がる。

お頭「…俺はゲイじゃねー!!」

案内人「そうか」

お頭「え？」

案内人「私はゲイだがな」

お頭「ひい！（案内人から離れる）」

案内人「冗談だ。私はバイだ」

お頭「ひい！」

案内人「冗談だ。そのような感情は持ち合わせていない。私は、魂の案内人だからな」

お頭「はあ？というか、ここはどこなんだよ？」

案内人「お前には見覚えがあるのではないか？」

お頭「…どうだったかな」

案内人「まあいい。ここは魂の転生場、生まれ変わりの間だ」

お頭「はあ？生まれ変わって…俺様が死んだとでもいうのかよ？」

案内人「そうだ、お前の肉体は死んだ。最期の瞬間というものは魂に深く刻まれる。魂に

語りかけてみる。思い出せるのではないか？」

お頭「そうだ…段々と思いついてきたぜ…！そうだ…俺は…！ちくしょうが…！俺は…！」

案内人「あの侍に斬られたことがそんなに悔やまれるか」

お頭「ゲイだと誤解されたまま死んだのか…！」

案内人「そっちか。しかし悔やんでも仕方がない。竹蔵としての人生は終わったのだ」

お頭「くそう…！俺はゲイじゃない…！」

案内人「ならばその想い、その魂、人生の教訓を、次の人生に刻み込むのだ」

青年（道士）が上手から入ってくる。

お頭「なるほど…ここは生まれ変わりの間。俺の魂はこいつに引き継がれるって訳か」  
案内人「その通りだ。お前はこの転生者に、何を刻む？」

お頭「決まってる。おい次の俺。俺は悪党だった。大衆から略奪を繰り返した。だがそうしないと生き残れなかった。そういう時代と環境だった。だから俺はこの生き方が間違っていたとは思わねえ。だから生きていくことで善悪に囚われる必要はねえ。俺が言いたいことは単純な話だ…正直に生きる！」

青年「正直に、生きる」

お頭「変な見栄ははるな！大事なことに嘘はつくな！」

案内人「切実だな」

お頭「俺は、女が好きだ！」

青年「女が好き」

お頭「もっと声を出せ！女が好きだ！」

青年「女が好きだ！」

お頭「エロい女が好きだ！」

青年「エロい女が好きだ！」

徐々に暗転していく。

お頭「男に体を触られるのは…すいません！」

青年「すいません！」

お頭「あと…動物は克服したい！」

青年「動物は克服したい！」

完全暗転。

お頭「刻み込め！その魂に！」

案内人「お前山賊向いてなかったんじゃない？」



【3幕】

老子「かーっ！」

明転。

舞台は老子の修行場。道士と老子がいる。

道士「いつてえ…」

老子「修行中に上の空とはまだまだ雑念を捨て切れていないな？タクよ」

道士「すみません、タオ老子…」

老子「まあ良い。次は拳法の型の修行じゃ」

道士「はい」

道士、老子の指導の元、拳法の型を練習する。

道士「俺の名前はタク・ベイベイ。ここ中国広東で捨てられていた俺をタオ老子は拾い、育ててくれた。そして現在、この20世紀を迎えようとしている時代に、俺は日々雑用をしながら拳法の修行中って訳なんだが…あの！」

※→の音声中、老子が道士にベタベタ触って指導している。

老子「なんじゃ？」

道士「あんまり、体にベタベタ触るのはやめてもらえませんか？なんかその…遠い昔のトラウマというかなんというか…」

老子「すまんすまん…そうじゃったな。…む！？危ない！」

銃声。老子が道士をかばう。

道士「老子！？」

上手から葉巻と拳銃を持ったボスと側近が現れる。

ボス「上手く避けたみたいだな、ミスタータオ。流石にそれくらいの勘は残っていたか」

老子「これはこれは。ここら一帯を仕切る裏組織のボス、サモハン・センドーではないか」

道士「何なんですかこいつら…？」

老子「まあ何、昔の因縁というやつじゃ…しかしどうやらゆっくり昔話でもという訳で

はなさそうじやのう…!」

ボス「その通りだ。今日こそお前との因縁、晴らさせてもらうぞ。老いぼれた今のお前に、昔のような力は残っていないはずだ。やれ!」

老子と側近が戦うが、側近が勝つ。

老子「ぐうう…! (倒れる)」

道士「老子! こいつ…よくも!」

道士、側近に殴りかかるが一撃でやられてしまう。

側近「ボス、コイツドウスル?」

ボス「そんなザコ、放っておけ。目的は果たせた。タオの始末というな。ぐっはっはっは!」

ボスと側近、はける。

老子「タクよ…お前は…楽しく生きるの…じゃ…」

道士「老子…!!」

道士(声)『こうして俺は…タオ老子の仇を討つために、旅へ出た』

ここからダイジェスト進行。BGMに合わせて、マイムで動く。

①食堂で飯を食べているところに悪党1・2が入ってきて戦闘。敵と一緒に食堂のおばちゃんを攻撃してしまい、敵と仲良くゲンコツを食らう。

②『1トン』と書かれた岩をいくつも背中に乗せて腕立て伏せを行うが力尽きて倒れる。その後、道士を助けるためおばちゃんが岩を軽々持ち上げ、驚く道士。

③ボス・側近との因縁の戦い。最後は側近を吹き飛ばし、それに巻き込まれてボスも吹っ飛ばす。そして一礼をする道士。

④黒子が『5年後』という看板を出す。道士、旅の途中に動物を克服しようとするが襲われる。犬に噛まれる、馬に体当たりされる、鳥(黒子の看板の裏に描かれた)に突かれる。なんとか跳ね除けようとする道士だが、結局力尽きてしまう。

⑤黒子が『10年後』という看板を出す。寝ている道士の周りにチンピラ1・2・3が現れ、財布を盗ろうとするが、チンピラ2・3を両手で制し、チンピラ1を両足で制する。

⑥黒子が『20年後』という看板を出す。チンピラ3が弟子1・2をいじめている。道士、チンピラ3を倒す。その後、弟子1・2が道士に弟子入りを求め、道士、弟子入りを認める。

⑦黒子が『50年後』という看板を出しながら、舞台前を通りすぎる。

ダイジェスト終了。舞台は道士の自宅。ベッドで寝ている道士。弟子1と弟子2、女医、看護婦がいる。

弟子1「老子！すっかりしてくださいー！」

弟子2「お医者様、わざわざ山奥まで来てくださり感謝します。それで、老子の容体は…？」

女医「今は落ち着いています…もう長くはないでしょう。残念ですが…」

弟子1・2「そんな…」

看護婦「また容体が急変しましたら呼んでください。あちらのお部屋で待機しております」

女医と看護婦がはける。

道士「ほおっほおっほおっ…もうワシが老子と呼ばれる歳か…」

弟子1・2「老子！意識が！」

道士「お前らに最後の教えを説く…しかと聞くが良い…」

弟子1・2「老子…！分かりました…！」

道士「良いか…拳法を極めるためには、雑念を捨てるのじゃ…雑念とは欲のこと…物欲、闘争欲、支配欲、性欲…あらゆる欲のことじゃ…」

弟子1・2「はい…！老子…！」

道士「ワシはあらゆる雑念を捨てた…そう、全ての欲を捨てた、断ち切ったのじゃ。お前達も、ワシのようになるのじゃ…」

弟子1・2「はい！老子！」

道士「その本棚にある、ワシの秘蔵書を全て授けよう…」

弟子1・2「ありがとうございます…！老子！」

弟子1・2、本棚に近づき1冊ずつ本を手に取り、表紙を見る。

弟子1 「酔拳秘伝の書…！」

道士 「最古から伝わる奥義が7つ載っておる…」

弟子2 「天地陰陽集…！」

道士 「天と地、陰と陽、相反する2つの力について記されておる…」

弟子1 「古今東西色んなおっぱい集…！…色んなおっぱい集？」

間

道士 「あらゆる胸筋の…鍛え方、その重要性が…載っておる」

弟子2 「巨乳のお姉さんが教えてあげるハートマーク…！」

道士 「…時には…目上の人に色々、教えてもらうのが、近道となる…そんな書じゃ」

弟子1・2 「ドキ！真冬だけど温水プールで水着天国、」

道士 「ごほ！ごほごほ！」

弟子1・2 「老子！」

道士 「ワシの本は中身を見ず全て燃やすのじゃ！」

弟子1・2 「老子！」

道士 「自分の道を本に頼るなど言語道断じゃ！これがワシの、最後の言葉…！必ず、必ず守るの…じゃ（目を瞑る）」

弟子1・2 「老子…！！」

女医と看護婦が入ってくる。

女医 「どうしました？大丈夫ですか？タクさん、タクさん」

看護婦 「どういう容体ですか？先生」

女医、看護婦の方を（後ろを）向く。道士、女医のお尻に顔を向ける。

※弟子1・2は道士が女医のお尻を見ている様子をずっと見ている。

女医 「そうね、少し見た様子だとまだ安定はしているように見えるけど。もう少し詳しく見てみましょう」

女医、道士の方を（前を）向く。道士、顔を戻し目を瞑る。

女医 「タクさん、苦しかったら言ってください」

看護婦 「どうでしょうか？」

女医、看護婦の方を（後ろを）向く。道士、女医のお尻に顔を向ける。

女医「うーん…なんか少し、元気になってる？少し息が荒い、みたいな？脈拍は早い気がするわね。もう一度見てみましょう」

女医、道士の方を（前を）向く。道士、顔を戻し目を瞑る。

女医「タクさん、辛かったら言ってください」

女医、看護婦の方を（後ろを）向く。道士、女医のお尻にめっちゃ顔を向ける。

女医「うん、まだ大丈夫そうね」

→台詞の後女医、道士の方を（前を）向く。道士、慌てて顔だけ戻す。

女医「それではまた何かありましたお呼びください」

女医と看護婦がはける。弟子1・2、道士をじつと見る。

道士「…なんじゃ？」

弟子1「あの…老子ひよつとして…性欲捨て切れてないのですか？性欲残ってます？」

間

道士「残って無いぞ」

弟子2「ですよね〜よかった〜」

弟子1「あー信じちゃう感じ？」

弟子2「そりやあ老子がないって言ってるんだから」

弟子1「まあまあ確かにそうなんだけどさ、」

道士、再び目を瞑る。

弟子1・2「老子！」

弟子2「老子！しっかりしてください！もうじきここに、老子が昔旅で出会った方々がお見えになるのです！どうかその方達と一目会うまでは…！」

弟子1「そうですよ老子！皆老子と一言でも良いからお話をしたいのです！ハオ・ラン殿、

覚えておりませんか？」

弟子2 「ユー・シュエン殿、覚えておりませんか？」

弟子1 「シャン・パイパイ殿、」

道士、顔を上げる。また顔を下げ、目を瞑る。

弟子1 「…ハオ・ラン殿！ユー・シュエン殿！シャン・パイパイ、」

道士、顔を上げる。また顔を下げ、目を瞑る。

弟子1 「おっばい」

道士、顔を上げる。

弟子1 「老子性欲残ってます？」

道士 「無いぞ」

弟子2 「ですよね〜よかったです」

弟子1 「まあね〜俺も信じたいけどね〜」

弟子2 「コワかった〜」

弟子1 「それはどうということ？」

道士、再び目を瞑る。

弟子1・2 「老子！」

看護婦が入ってくる。道士の前に立つ（弟子と道士の間に入る形）。以下看護婦は弟子に話しかける（弟子に顔を向ける）。

看護婦 「大丈夫ですか？タクさんの容体が急変したのですか？」

道士、看護婦のお尻に顔を向ける。

弟子1・2 「老子？」

看護婦 「どうしました？」

道士、看護婦のお尻に手を伸ばし、触ろうとする。

弟子1 「正気ですか？こっちは残念な方ですよ？」  
看護婦 「はい？」

道士、寸でのところでグッとこぶしを握り締め、お尻に触らない。

弟子1・2 「老子〜（ホッとする）」

弟子1 「性欲残ってます？」

道士 「無いぞ」

弟子2 「ですよね〜」

弟子1、手を広げて呆れるポーズ。道士、再び目を瞑る。

弟子1・2 「老子！」

看護婦 「大変…！先生！先生！」

弟子1 「老子！…おっばい！」

老子、動かない。女医が入ってくる。

弟子1 「そんな…！おっばい…！おっばい…！おっばい…！おっばい！」

女医 「どういう状況？」

弟子1 「おっばい…！」

弟子2 「突然の雨に服が濡れ、透けて見えるブラジャー」

道士、顔を上げる。

弟子1 「お前もやっぱり分かってやったよね？そして老子性欲残って、」

老子 「無いぞ」

道士、再び目を瞑る。

弟子1・2 「老子！」

道士（声）『良い…人生じゃった。色々あったが…思い残すことも無い』

走馬燈により、ボス、老子（看護婦、カツラをとって髭を付ける）、食堂のおばちゃん（弟子1、カツラを付ける）が出てくる。

道士（声）『弟子達…裏組織のボス、サモハン・センドー…そして我が師、タオ老子…食堂のおばちゃんまで…』

老子と食堂のおばちゃん、元に戻る。ボス、はける。お頭が下手側に出てくる。

道士（声）『こやつは…誰だったか。何か…とても、とても大切な…』

お頭「おい次の俺！…正直に生きろ！」

道士（声）『…うん？』

お頭「変な見栄ははるな！…大事なことに、嘘はつくな！」

※以下お頭、道士の台詞に合わせて叫ぶマイムをしたりする。

道士（声）『そうか…そうじゃったな。そんな、そんな大切なことも忘れておったようじゃ

な、ワシは…。ワシは…！』

道士「ワシは…」

弟子1「…老子？」

道士「ワシは…女子（おなご）が好きじゃ！」

弟子1・2「老子…！？」

道士「弟子達よ…ワシは！女子が大好きじゃ!!」

弟子1・2「老子…！」

道士「特に…エロい女子が大好きじゃ！エロい女子が大好きなんじゃあ…！」

弟子1・2「老子…！」

道士「弟子達よ…欲を捨てることは確かに大切じゃ…しかし…！人生にはもつと…も

つと大切なものも、あるのじゃよ」

弟子1・2「老子…」

道士「ワシは最後に、そのことに気付くことができただけでも…本当に…よかった」

道士、目を瞑る。お頭、はける。

弟子1・2「老子…？老子…！」

女医「…ご臨終です」

弟子1・2「老子…！！」

看護婦「見て。お爺さん、とても良い笑顔だわ…」

女医と看護婦、はける。その後弟子1・2、はける。

倒れている道士が残る。真ん中から案内人が入ってくる。



【魂の間3】

舞台には道士（下手側）と案内人（真ん中）。起き上がる道士。

案内人「おはよう」

道士「（案内人に顔を向け、その後辺りを見回す）ふむ…ワシは死んだか」

案内人「ほう、分かるのか」

道士「伊達に長生きはしとらんよ」

案内人「もう亡くなったのだから」

道士「ほっほ。それで、ここはどこじゃ？あんたは地獄の閻魔さん…には見えんもう」

案内人「私は魂の案内人。お前の魂を次の人生へと導く者だ」

道士「なるほどのう。ワシは仏教徒ではないが、輪廻転生は本当にあつたか」

青年（健弘）が上手から入ってくる。

案内人「そしてこいつがお前の転生先だ」

道士「デカいな…しかしそうか…だいぶ長生きさせてもらったが、まだ続くか」

案内人「お前の魂の旅はまだ終わらない。さあ、魂に刻むのだ、お前の人生の教訓を」

道士「教訓と言われてものう…人生、良いことも悪いことも色々あったが…死んだ今となっては何が大切なことじゃったか…全て大切じゃったし、全てどうでも良いことじゃったとも言える…ふむ、次のワシよ」

青年「はい」

道士「自由に生きたら良い」

青年「自由に、生きる」

道士「好きなことをしたら良い」

青年「好きなことを、する」

道士「時にはツライことから、逃げても良い」

青年「逃げても、良い」

道士「自分の短所ではない、長所を見たら良い」

青年「長所を、見る」

道士「じゃがな…ただ1つ、自分の信念には嘘をつくな」

青年「信念に、嘘はつかない」

道士「そして…やっぱり動物はコワイ」

青年「動物は、コワイ」

案内人「中々克服できないなそれ」

「魂廻（たまる〜ぶ）」

道士「おととつと、色々言ってしまったのう。年寄りな話が長くなっていかんわい。じやが…結局は、楽しく生きたらそれで良い」

徐々に暗転していく。

青年「楽しく、生きる」

道士「お主の人生が希望に溢れることを祈っておるよ。ほおっほおっほおっほお」

完全暗転。

【4幕】

明転。

舞台は健弘の部屋。パソコンのキーボードをひたすらカタカタする健弘。ブツブツと独り言を言っている（ひと昔前の2ちゃん用語を使いながら）。

健弘「…ぶふふつ！テラワロス…！魔女っ子魔女美ちゃん萌え〜。…なんだこいつ？ウザ〜。永遠にヘルプのイルカが出てくるウイルスを送り付けてやる〜」

上手から母が出てくる。道士も下手側に様子を見にくるようにならんと出てくる。母、健弘の部屋の扉を叩く。

※以下道士、健弘の台詞に『ええー…』みたいなリアクションをとる。

母「健弘、健弘、いい加減部屋から出てきなさいな。いつまで引きこもっているの？」

健弘「うるさい母親〜！僕は自分の人生、好きなことをして、自由に生きるんだ〜」

母「自由って健弘…そんなこと言わずちゃんと学校にいきなさいな」

健弘「学校〜？そんな所に行ってもツライだけだ。僕は人生、ツライことから逃げて生きるんだ〜」

母「健弘、そんなこと言わずにそのツライこと、苦手だと思おう自分の短所を克服してみないかい？」

健弘「僕は短所など見ない。僕は自分の長所を伸ばしたい、そういう意志を持つ〜」

母「確かにそういう考え方も大事だけど…じゃあ健弘の長所って何だい？」

健弘「勿論パソコンさ。僕はこのパソコンでプログラミングを極め、ついにはネット内のプログラムを書き換えられる程の技術を手に入れたのだ！」

母「健弘？」

健弘「そう、僕はこの技術を使い…」

母「健弘…！まさか危ないことを、」

健弘「エロサイトのだましにひっかからなくなったのだ！」

母「宝の持ち腐れだよ！もっとその技術を有効に使いな！ていうかさっきからあんた、言っていることがずつとクソだね！あんたの人生観ずつとクソだね！」

健弘「何〜？僕の人生観にケチをつけるのか〜？」

母「まったく…せつかく母ちゃん、あんたの心が癒されるようにプレゼントを用意したのに」

健弘「プレゼント？もしかして、魔女っ子魔女美ちゃんの限定フィギュアかい！？」

母「死にな！そんなもの死んでも用意しないよ！可愛い、ワンちゃんさ」

犬、元気よく上手から出てくる。

健弘「犬はやめろ！動物はダメだ！絶対部屋に入れるなよ！」

母、犬に乗って健弘の部屋に入り、そのままUターンして戻る。その後犬、はける。

母「なんだいなんだい！母ちゃんの好意を！」

健弘「うるさいうるさい！もう僕に構うな！ほっといてくれ！」

母「健弘……」

健弘「でもご飯は部屋の前に置いてくれ！」

母「健弘？」

健弘「二日に一度は揚げ物にしてくれ！ジャンプは毎週部屋の前に置いてくれ！僕がトレイに行く時を見計らってその際に部屋をサッと掃除してくれ！それらをしっかりと守った上で、僕の話は構わずほっといてくれ！」

母「クソだね！だいたい構われてるよあなたの生活！というかそういうことをはっきり要求するんじゃないよ！あなたには引きこもりとしての信念もないのかい！」

健弘「信念だと……？見損なうな……！僕は、僕は自分の信念だけには絶対に嘘をつかないって決めているんだ……！」

母「あなたの信念だ……？はん、どうせ部屋から出ないとかそんなんだろう？」

健弘「……正解！」

母「やったね！じゃない！正解かい！ホントクソだね……！あなたね、良く考えてごらん？」

健弘「何？」

母「確かに今は引きこもりでも良いかもしれないよ。ただ、10年、20年、30年後を想像してごらんよ。ずっとずっとずっと部屋にこもって、やることはそのパソコンだけ。そんな人生、本当に楽しいのかい……？」

健弘「………楽しい！」

母「お幸せにね！」

母、上手へはける。道士も何か言いたそうにしながら、すーっと下手へはけていく。

再びキーボードをカタカタする健弘。

3幕のダイジェストのBGMが流れる。ここからマイムのみ。

・ひたすらキーボードをカタカタする健弘。顔を上げ頷く。

・ひたすらキーボードをカタカタする健弘。寝落ちする。

・ひたすらキーボードをカタカタする健弘。フィギュアのスカートの中を眺める。

・ひたすらキーボードをカタカタする健弘。寝落ちする。何回か繰り返した後、寝落ちし、そのまま目を覚まさない。

真ん中から案内人が出てくる。

【魂の間4】

舞台には健弘（下手側）と案内人（真ん中）。起き上がる健弘。

※基本的に健弘は人の目を見て喋ることができない。

健弘「あれ？ここはどこだ？」

案内人「ここは魂の間」

健弘「うわあ！だ、誰だ！？」

案内人「私は魂の案内人。お前は死んだのだ」

健弘「死んだー！？…あれ？でも何だろう…なぜだか納得してしまう…」

案内人「お前の魂は理解しているということだ」

健弘「魂？さっきから出てくるが、どういうことなんだ？」

案内人「簡単なことだ。お前の魂は死んでいない。お前は次の人間へと生まれ変わるのだ」

健弘「生まれ変わる？…転生？…そうか！僕はこれからファンタジーな異世界へ転生し、剣に魔法に大活躍するんだな！」

青年が上手から出てくる。

案内人「その転生者に、お前の人生の教訓を伝えろ」

健弘「無視はやめろ」

案内人「そもそもお前の自我は残らない。さあ、早く教訓を魂に刻み込ませろ」

健弘「教訓？」

案内人「お前の人生で学んだことを次に伝えれば良い。しかしお前全然目を合わせないな」

健弘「それだったらくさんあるぞ…！まずは…リアルの間、三次元はクソだ！」

青年「三次元は、クソ」

健弘「二次元こそが嗜好！インターネット、アニメ最高！」

青年「二次元は、最高」

健弘「しかし時にはネット上でもクソな奴がいる。そんな時はそいつのパソコンにウイルスを送り込めろ！嫌な相手は見えないところから攻撃しろ〜！」

青年「見えないところから、攻撃」

健弘「魔女っ子魔女美ちゃん。ペロ。ペロ〜！」

青年「魔女美、ペロ。ペロ」

健弘「魔女美ちゃんを呼び捨てするな〜！」

青年「ごめんなさい。魔女美ちゃん。ペロ。ペロ」

健弘「よしよし。良いぞ良いぞ次の僕。これらを忘れずに、行ってこい！次の人生へ！」

徐々に暗転していく。道士が真ん中から出てくる。明転。

道士「アホか〜！！！」

健弘・青年・案内人「え？」

道士「え？じゃないわい！何そのくっそみたいな教訓!？」

健弘「何だお前は〜？」

道士「お前の前世じゃよ！よくもまあワシの来世をあんなくっそみたいな人生にしてくれたのう！」

健弘「なんだと〜？」

道士「お前の魂に刻んだワシの言葉がまさかあんな風に都合よく利用されるとは思わなかったわい！」

案内人「ちよっと待ってちよっと待って」

道士「なんじゃ？」

案内人「いやなぜお前がここにいる？普通無理よ。前世の人間がもう一度この魂の間に出てくるのは」

道士「なぜと言われているのう」

案内人「(拳銃を懐から取り出す) いいから思い当たることを全て話せ。こう見えて私は今、パニックだ」

道士「堂々と言われても…。そうじゃな…。ある時ワシはこいつの中で断片的にじゃが度々人生を見られたのじゃ。しかし、全て碌なものではなかった。ワシは正直イライラした。もうかなりイライラした。これは何か一言文句を言ってやらねば！  
…と思っていたら、」

案内人「ここに出られた、と？」

道士、頷く。案内人、道士の足元を撃つ。

道士「えー…」

案内人「なんだその理由！」

道士「いやワシに言われても…困る」

案内人「そういう感情的な理由で出てこられるんだここ…。ということはこの魂の我が強すぎたのが原因か…？」

道士「もう良いじゃろ？その物騒なもんをしまっておくれ」

案内人「安心しろ。この銃は万が一魂が暴れた時に使用するものだ。つまり今のはただの脅し。それ以外で、撃つことはない（銃をしまう）」

道士「…いやさつき撃ったけどね。まあとにかくじゃー！ワシはこやつの人生を見て尋常じゃなくイライラしたのじゃー！しかもけっこうしぶとく生きてたじゃろ！？結局何歳まで生きたんじゃお主は！」

健弘「確か…72歳」

道士「けっこう生きたな！ワシとあんまり変わらないじゃないか！というか働きもせずつどうやって生活できたのじゃー！」

健弘「親の遺産だ〜」

道士「クソじゃな！」

健弘「何だところ？さつきから言いたい放題言いやがって〜。僕だって前世のお前の記憶を思い出してやる〜（頭を抱える）」

道士「無駄じゃ無駄じゃ。例え思い出せたとしても断片的にだけじゃワシの人生の汚点など簡単に分かるか」

健弘「突然の雨に服が濡れ、透けて見えるブラジャー」

道士「そこ見つける〜？」

健弘「お前の最期だっけっこう酷いじゃないか〜」

道士「お主に比べればだいぶマシじゃわ。お主にはな、人生での成長を感じられないじゃー」

健弘「何〜？僕だって成長してます〜」

道士「本当にそうかのう？体は爺さんまで生きたのに、今この場にいるお主の魂が若い時のままでいるということは、魂の成長がそこで止まったということではないのかのう？」

健弘「は、はー！？」

案内人「エロ爺の言う通りだ」

道士「急な悪口」

案内人「彼の魂はその年齢の時点で成長をやめたのだよ」

健弘「ぐぐぐぐ…！」

案内人「逆に言えば、その時点までは魂に刻むべき教えがあったということだがな」

健弘「そくだそくだ！僕だってハッキングとかプログラミングとか色々できるんだぞ

〜！」

道士「碌なことに使ってなかったんじやろその技術！詳しくは分からんが。とにかくじや！もうお前みたいなクズを世に出す訳にはいかん！こいつ（青年）の魂はワシが刻む！」

健弘「なに〜？」

お頭「いやいやいやいやいや！」

お頭が真ん中から出てくる。

お頭「それだったらお前だけに任せておけねえジジイよ！」

道士「誰じゃ!？」

お頭「お前の前世だよ！お前の最期にちよつと出てきただろうが！」

案内人、お頭をはけさせようとする。

お頭「…何々何々!？」

案内人「とりあえずお帰り願おうと思って」

お頭「なんでだよ!？」

案内人「ふん。なんでも何も普通出てこられない前世の人間が2人も出てきたのだ。はっきり言おう。今私はパニックで、ゲボが出そうだ」

お頭「知らねえよ！俺だってこいつ（健弘）の生き方が気に入らねえから文句を言いにくたんだよ」

健弘「はあ？お前には言われたくないんですけど？お前のこと見て遠い記憶が少し蘇ったけど、お前なんてただの悪党じゃないか。人に迷惑しかかけてないじゃないか。その点僕は引きこもっていただけだから人には迷惑をかけてない」

道士「いやお主も親に迷惑かけてたじやろ」

健弘、首をかしげる。

道士「不思議そうに首をかしげるな！」

案内人「クソだなー」

道士「やはりこんな奴に次の魂を刻ませる訳にはいかん。ワシがやる」

お頭「いやそもそも爺、お前の教訓でこんな奴が生まれたんだ。お前だけには任せられねえっての!」

健弘「やーい、言われてやんの〜」

案内人「お前もこんな奴って言われてるんだぞ？」



騎士「ちょっと待ったー！私もその話し合い、参加させてもらおう！」

騎士が真ん中から出てくる。

お頭「誰だ！？」

案内人、懐から拳銃を取り出し、騎士を撃つ。騎士、倒れる。

お頭・道士・健弘「えー！？」

お頭「何やってんの！？」

案内人「いや、パニックだから」

お頭「理由になってねえ！」

道士「しかも暴れてないのに撃ちおったぞ」

騎士、起き上がる。

騎士「いきなり何をする！私が死んでいなかったら死んでいたぞ！」

案内人「こいつは魂だ。死ぬ訳がないだろう。ただ普通に、痛いだけだ」

お頭「なんで偉そうなんだよ」

騎士「とにかく、私もその話し合いに参加させてもらおうか」

案内人「結局出そろういおって…なんて私の強い魂なのだ…」

騎士「私はこの中で一番古い魂だ。ゆえに断片的にだがお前達のこととは分かる。お前（健弘）、クソみたいな人生だったな」

健弘「うるさいな。（頭を抱える）うん、そういうお前だって友達がいなかったみたいじゃないか。僕と同じだ〜」

騎士「はあ？私はいなかったのではない！作らなかつただけだ！」

お頭「俺に転生する時友達が欲しかったって嘆いてたぞこいつ」

騎士「ペーい」

お頭「まあ何にしたってこいつ（健弘）より酷い人生ってことは無いけどな」

道士「そうじゃな。中々こやつより酷いってことは無いのう」

健弘「…お前達、さっきから僕の人生に散々言ってくれているが…お前達に何が分かる…！」

騎士・お頭・道士「え？」

健弘「僕だってなあ…！人生の初めっからこうだった訳ではない…！断片的にしか僕のことを知らないお前達に、何が分かると言うのだ〜！」

騎士「…訳有りということか？」

お頭「はっ。じゃあ話してみるよ、お前が引きこもりになっちまった訳ってやつをよお」  
道士「まあ腐っても、ワシらは同じ魂じゃしな」

健弘「…良いだろう、話してやる。僕には、幼馴染の女の子がいたのだ。良く一緒に遊んでいた。そう、僕はその娘のことが好きだった。僕はその想いが抑えきれなくなった。そして僕は中学校の卒業式で、その娘に告白をしたんだ。しかし僕は、返ってきた彼女の言葉に絶望した。その娘に、なんて言われたと思う？（すこむ）」

騎士・お頭・道士「え…？」

健弘「…喋る時人の目を合わせられない人は無理って」

お頭・道士「そりやそうだよ！」

道士「当然の返答じゃ。すこんで言うことじゃないわい」

お頭「どうか引きこもる前からそんな挙動だったのかお前」

健弘「引きこもる前はそこまで酷くはなかった〜！でもその後！その後の彼女の言葉も聞いてくれ！」

道士「もういいよ」

お頭「どうせ何てことねえんだろ」

健弘「そもそも、あなた誰って？」

お頭・道士「それは悲しい！」

道士「そもそも認識されていなかったのかい…」

お頭「え？でも何？じゃあお前が勝手にその娘のこと幼馴染だと思ってた訳？」

案内人「気持ち悪い」

健弘「はあく？幼馴染なんですか？一緒に学校行ってたんですけど？小2まで」

案内人「短い」

健弘「ふん、そして僕はリアルの間人間が信じられなくなり、引きこもりになったのだ。これで分かってもらえただろう。二次元の人間なんて、クソなのだ！」

お頭「それただの失恋じゃねえか。しかも一回だけ」

道士「メンタルが弱い。お主それくらいのことだ、」

騎士「いやお前のその気持ち、分かるってばよ…！」

お頭・道士「うん？」

騎士「確かにお前の言う通り、人間はクソだ…！無い罪を作り上げるし…！挙句燃やすし！」

案内人「そう言えばこいつも人間に絶望してる系男子だったな」

道士「何そのカテゴライズ？」

騎士「お前の生き方は理解できんが、現実の人間が信じられない気持ちは分かる…！」

健弘「分かってくれるか〜！だったら現実を忘れるために僕はキミに二次元の世界をおススメする〜」

騎士「二次元の世界…実は断片的にお前の人生を見て少し興味があったのだ」

健弘 「こんなところに同志がく流石僕の魂。さすれば手始めに魔女っ子魔女美ちゃんを、」

騎士 「魔女の話はするな!!」

健弘 「えー…?」

案内人 「ひゅーイカレてるぜ〜…っと、もうそろそろ無駄話は良いか?」

お頭 「確かに無駄話だったぜ…」

青年 「結局僕は、どうすれば?」

道士 「そうじゃったそうじゃった。では今からワシがお主に教訓を伝える。よく聞け」

お頭 「おいだから爺には任せられねえんだよ。良いか、俺様の話を聞け」

騎士 「待て待てここは私に任せろ。私が一からやり直してやる」

道士 「いやいやワシが…」

お頭 「いやいや俺様が…」

騎士 「いやいや私が…」

騎士・お頭・道士の3人、「いやいや」言いながら近くに集まってゆく。その隙に健弘、青年に近づき勝手に語り続ける。

青年 「二次元最高、二次元マジ神、二次元100点満点中マジ無量大数…」

騎士・お頭・道士の3人、「いやいや」言いながら健弘に近づき、青年から引き離す。その際、騎士の手がお頭に当たってしまふ。

お頭 「いやいや、今手当たったぞ…! (騎士を叩く)」

騎士 「いやいや、そんな強く当たってないだろ…!」

騎士、お頭を叩き返すが、勢い余って道士にも当たる。

道士 「いやいや、ワシにも当たったぞ…?」

お頭 「いやいや、やんのか…?」

騎士・お頭・道士の3人、それぞれのスタイルで戦い合う。その隙に健弘、青年に近づき勝手に語り続ける。

青年 「…引きこもりでも風呂に入れ。ある時部屋が臭いなどにおいの元をたどった結果、自分の脇のにおいであったことが何度もあるゆえ」

戦いがエスカレートしていき、案内人、3人を拳銃で撃つ。健弘にも撃つ。4人、倒れる。

健弘「いやいやなぜだ〜？」

案内人「せめて話し合いをしろ」

騎士・お頭・道士「(起き上がる) だつてー」

案内人「人生は様々だ。自分の教訓だけ主張しようとするのではなく、話をまとめてみれば良い」

道士「ふむ、まあ一理ある」

案内人「お前らは同じ魂だ。何かあるだろう。まったく違う人生でも、何か共通して成し遂げたいことが」

4人、考え込む。健弘、手を挙げる。

お頭・道士「却下」

健弘「早いな。せめてちゃんと聞いてみてくれよ〜」

お頭「何だよ？」

健弘「…動物の克服」

騎士・お頭・道士「ああ〜」

騎士・道士「…無理かな」

お頭「まあお前らは直接襲われてたからな」

案内人「そんなに苦手か？犬とか可愛いだろうに」

騎士「いや、私を襲った犬は何も可愛くなかった」

道士「ワシを襲った犬も何も可愛くなかった」

お頭「まあそもそも動物の克服って…動物と仲良くなるのが人生の一番の目標つつうのは、イマイチパツとしねえなあ」

道士「そうじゃそうじゃ。動物と仲良くなるくらいなら人間の女子と仲良くする、っていうか…エロいことがしたいのう。良いよなお主(お頭)は。大悪党じゃったし、そういう経験も豊富なんじゃろ？」

お頭「ああ？そんな話、お前にする必要はねえな」

道士「いやいやいや〜何か1つくらい聞かせておくれい。なんか大量の遊女と一緒になつて1体8でとか、」

お頭「ぶざけんな。そういう行為は、1体1でお互い愛し合ってからじゃないと駄目だろ！」

道士「とんだウブじゃねえか！山賊なのに！」

騎士「いやそれはおかしい。お前は死ぬ日、攫ってきた町娘を無理矢理襲おうとしたじ

やないか。最期の記憶だから私も知っているぞ！」

道士「確かに！そう言われればワシにもそんな記憶があるぞ！」

健弘「嘘をついたなく？」

騎士「貴様！言い逃れはできんぞ！」

お頭「…だからあ!!」

騎士・道士・健弘「うん？」

お頭「だからその日はあ!! アジトにやって来る女の子にい!! 初めてそういうこととしてみようってえ!! 頑張って凄んだんじゃあねえか!!」

騎士「とんだウブじゃねえか！」

お頭「それを…それを…信じてた仲間に全員ゲイだと暴露され…そのまま自分もゲイだと思われ…最後はゲイの侍に斬られたんだぞ…分かるかこの気持ち！」

騎士「ご、ごめんって。そういう事情だとは知らなくて」

案内人「そもそも無理やり襲うのは絶対駄目だよ」

道士「どうかそういうお主(騎士)はどうなのじゃ?こっち(小指を立てる)の方は?」

騎士「…騎士道とは貞操も守るもので、」

健弘「こいつも経験無いぞ〜」

騎士「お前だけには言われたくないのだが」

健弘「なんだと〜?僕に経験が無いとなぜ分かる〜?」

騎士「誰でも分かるぞ」

健弘「何〜?僕だってゲームの中だったら恋愛マスターだったんだぞ〜!」

お頭「ゲームってなんか、お前がパソコンってやつでカタカタしてたやつだろ?そんなので偉そうにされてもな」

健弘「僕は難易度の高い恋愛ゲームもやっていた〜!特に2030年以降のVRを使った恋愛ゲームはすごかったんだぞ〜!ほとんど現実と変わらないゲームの世界なのに、それでも全てクリアできていたんだぞ〜!お前達よりは女心を理解している〜」

騎士「難しいことはよく分からんがこいつ…いくらそのゲーム?の中とはいえ女性への行動・接し方を間違えることはなかったということか…?」

健弘「ゲーム中の行動を間違えた時はハッキングしてプログラム自体を書き換えていた〜」

お頭「ずるいな!つうかそれ女心関係ねえじゃねえか!」

道士「お主のそのプログラミング能力がすごいだけじゃ」

健弘「ふふ、すごい、か。伊達に人生のほとんどをパソコンに費やしていないからな〜」

案内人「引きこもりが言っても全然カッコ良くないな」

健弘「しかし残念だ。もう少し経てば自分がゲーム、二次元の世界に入ること可能だったはずさ〜。そんな中で恋愛ゲームをやったか〜」

お頭 「なんかうだうだ言ってるけどよ。結局はこいつも俺達と変わらないってことだろ？」

道士 「うむ」

案内人 「つまりお前らの魂は4回も人生を経験しているのに、いまだ女性経験が無い、ということか…因みに、キスはしたことある人」

お頭、手を挙げようとする。

案内人 「勿論女性とだ」

お頭、手を下げる。

案内人 「うん…まあしかし、これで決まったのではないか？お前達が次の魂に刻むことを」

騎士・お頭・道士・健弘 「え？」

案内人 「いやえ？じゃなくて。お前らは、女性にモテたいのだろうか？」

間

騎士・お頭・道士・健弘、驚きの顔（気付きの顔）をする。

案内人 「今気づいたの？」

お頭 「確かに…そうかも知れねえ！」

道士 「ワシ達はモテたかったのか…目から鱗じゃ！」

案内人 「いやお前らに関しては散々女性が好きだって叫んでたからな」

騎士 「いやでもモテモテまではちよつと…騎士道的に違うかな」

健弘 「僕も別に…三次元の女達にモテるなんて、興味ないね」

案内人 「特にモテなそうな2人がまだグダグダ言ってるな。変な見栄をはるな」

健弘 「ただまあ1人くらいの、恋人くらいはいても良いかなと、そういう意志は持つ」

騎士 「1人の女性くらいなら、まあ良いだろう」

案内人 「どの立場なんだお前らは」

道士 「エロいことができる女子であれば、それで良い」

案内人 「爺は素直で良いぞ」

お頭 「確かに俺らの魂がモテモテになるつつうのは目標が高いか。じゃあ俺達が次の魂に刻むことは、恋人をつくる。これにするぞ」

騎士・健弘 「よし!!!」

案内人 「お前らやる気満々ではないか」

青年「恋人を、つくる」

道士「しかし…具体的にはどうすれば良いかのう？」

お頭「ああ。少しでも役に立つ助言を魂に刻み込ませたいが…」

案内人「助言するのがお前達なものなあ」

お頭「うるせえな」

騎士「しかし、今の我らは1人ではない。4人もいるのだ。乏しい恋愛の知恵でも皆で出し合ってゆけばきつとうまくまとまるはずさ」

お頭・道士・健弘、頷く。

お頭「それで、1つあるんだけどよ。俺は悪いことやってたら、悪い男が好きくみたいな女が黙ってても寄ってくる、実は少しだけ思っていたんだ。お前達にもそういうところがあったんじゃないやねえか？お前（騎士）とか、騎士道にこだわってれば硬派でカッコ良いくみたいに女が寄ってくるのか、思ってたんじゃないやねえか？」

騎士「…ちよつとだけな」

案内人「ちよつと正直になったなお前」

お頭「まあだから俺が言っているのは、お前らの話を聞いた感じでも俺達は皆受け身過ぎたんじゃないか？待ってても女は来ない。だからこつちから女にもつと、積極的にいこうぜ」

青年「積極的に、いく」

健弘「ふふふ…僕は一度告白したけどな」

お頭「その程度のことでは威張るな！俺だって1回女を襲おうとしただろ！」

案内人「そつちの方が威張っちゃ駄目だが。最低の行為だぞ？」

健弘「あの時の僕の告白だって、きちんと目を見てしていたら成功したに決まっている」

案内人「そういう問題ではない気がするが」

健弘「良いか、相手の目をしっかりと見て誠意を伝えるんだ」

案内人「今見てないけどな」

青年「しっかりと目を、見る」

道士「ワシものう…修行とかカッコつけずに変な見栄張らないで、日々彼女ほしくとか言っておれば何か変わったかもしれないのう。次のワシよ、女子には正直に振る舞うのじゃよ」

青年「正直に、振る舞う」

騎士「私も娘をかばっていた時、しつこくし過ぎないでもう少し引いてみたりすればよかったのかもな。そうすれば燃やされたりもしなかったかもしれない」

案内人「お前のは他の者と深刻さが違うんだよな」

騎士「覚えておくが良い。女性と接する時は、引き際も肝心だ」

青年「引き際が、肝心」

道士「うむうむ。良い感じにまとまってきたのう」

案内人「やっと解放される」

騎士「では最後に…円陣を組もうか」

案内人「なぜ？円陣？」

騎士「なぜって…私には友がいなかったからそういうのに憧れがあるのだ！悪い  
か！？」

案内人「いや悪くはないが。大の大人がやるにはけっこう恥ずかしいよ？」

お頭・道士・健弘「…仕方ないな（円陣に加わる）」

案内人「まんざらでもないのなお前ら。まあ同じ魂だものな」

青年も円陣に加わる。

騎士「ほら、あなた（案内人）も入るが良い」

案内人「なぜ？…仕方ないな（円陣に加わる）」

お頭「お前もまんざらでもないんかい」

騎士「よし！5回目の人生、絶対…絶対彼女作るぞく！」

6人「おおく！」

案内人「夏休み前みたいだな。しかしそうか、この魂の人生も5回目、か。（おもむろに

青年の肩に触れる）…ふむ、なるほど」

健弘「どうしたく？何か視えるのか？」

案内人「どうやらこの次は、ある意味お前（健弘）が理想とする世界かもしれないな」

騎士・お頭・道士・健弘「え？」

暗転。



【5幕】

舞台は荒廃した世界のどこか。『ウィーンガッシャン』という機械音が聞こえる。明転。

舞台にはアンドロイド1とアンドロイド2（以下ロイド1・ロイド2）がいる。

ロイド1「（ロイド2に話しかけている）びぼぼ、びびびば。びーばーびーばー、びっぴっ

び。びばばっば、びーばー…びぼっばへー？」

ロイド2「…いや何言ってるか全然分からねえんだけど」

ロイド1「びびー？」

ロイド2「いや、びぼびぼ意味不明なんだけど」

ロイド1「びぼびぼびっばーび？（何かに気付き、自分の翻訳機をオンにする）…ばーか！」

ロイド2「なんだとこの野郎！（ロイド1を殴る）」

ロイド1「痛い！…何お前、もう人間の翻訳機の方を起動してるの？」

ロイド2「そりゃあこの辺はもうコンピュータの支配がかからない地下なんだからそうするだろう」

ロイド1「いくら地下だからって、そんな早々人間に出会うこともないと思うよ。もうだいぶ数も減ったって聞くし…」

ロイド2「もしかしたらすぐに会うかもしんねーじゃん、コンピュータに反旗を翻そうとする人間達によ」

ロイド1「反乱軍か…いやでも翻訳機を起動するのは人間を見つけた後で良いと思うけど。エネルギーだって無限じゃないんだし。それにあいつらに翻訳機の電波を傍受される危険だってあるよ。だから翻訳機、切っておこうよ。（翻訳機をオフにする）」

ロイド2「…分かった分かった（翻訳機をオフにする）」

ここからロイド1とロイド2、機械語で話しながら何か作業をしている。

ロイド1「びびぼびーぼ」

ロイド2「へーへー」

ロイド1「ぼびぼっば」

ロイド2「びーびー」

下手から青年とその仲間兵がゆっくり入ってきて、アンドロイド達の様子を見ている（顔でリアクションする）。

「魂廻（たまる～ぷ）」

ロイド2 「ぼびぼび。ぴびぼーぼぼぼ…びび」

ロイド1 「大爆笑する( ) ぼっぼーぼ…びび」

ロイド2 「大爆笑する( ) ぴびぼーぼぼぼ…びび」

ロイド1 「大爆笑する( ) ぼっぼーぼ…びび」

ロイド2 「は？(キレる)」

ロイド1 「焦りながら( ) ぼへぼへぼへ！へっへーへ…びびー」

ロイド2、大爆笑する。

ロイド1 「へぼー(ほっとする( )) へっへっへっへっへ」

ロイド2、ロイド1にビンタする。

ロイド1 「へぼー！？」

ロイド2、再びロイド1にビンタするが、避けられる。

ロイド2 「怒りながら( ) へふへふへふっへっへっへっへっへ！ぴびっぼびっぼびっぼ…びー」

ロイド1、大爆笑する。

仲間兵 「なんで！？」

ロイド1とロイド2、青年と仲間兵の方を向く。

仲間兵 「いやどう考えても爆笑する会話の流れではなかったで、しよ…？(アンドロイド達が自分の方を向いていることに気付く)」

見つめ合う4人。

ロイド1・2 「びー…!!!」

青年・仲間兵 「うわー…!!!」

びーびーぎやーぎやー騒ぐ4人。色々遊ぶ。青年、太ももを触られて拒絶反応とか。謎拳法を出したりとか。  
※この時、はしゃぎ過ぎて青年が足を痛める。以降青年、治るまで足をかばって

いる。

仲間兵 「いやそれはなんでだよ！といかなかんだこのくだり！」

青年 「いやなんか途中から少し楽しくなってきたよ」

再び4人、目を合わせる。ロイド1・2、翻訳機をオンにする。

ロイド1・2 「こんにちは」

青年・仲間兵 「え？」

仲間兵 「なんだあんた達、ちゃんと言葉を話せるのか？」

ロイド1 「うん、この翻訳機は高度なものでね。キミ達人間の言葉を聞き取れるだけでなく、

私達アンドロイドの言葉も人間に翻訳して聞かすことができるんだ」

青年・仲間兵 「へー」

仲間兵 「じゃない！つうことはやっぱりお前らアンドロイドか！とうとう地下にまで攻

めてきやがったのか！？」

ロイド2 「違う違う」

仲間兵 「え？」

ロイド1 「私達はあなた達人間と争う気はないよ」

仲間兵 「はあ？」

ロイド2 「それよりお前（青年）、さっき騒いでた時足を痛めただろ？（青年に近づく）」

仲間兵 「やめろ！近づくな！」

ロイド2 「まあまあ、そう警戒すんなよ。おい（ロイド1を呼ぶ）」

ロイド1 「うん。あなたの足、私が治すよ（青年の足に手を置こうとする）」

仲間兵 「やめろ！ケンに変なことをするな！」

ロイド1、青年を庇う仲間兵を叩く。痛がる仲間兵。その後、青年の足に手をかざす。

青年 「直った！」

仲間兵 「俺も直った！いや俺の方はなんでだよ！周りにも効果あるの？技術力すこ！」

ロイド1 「よかった」

青年 「ありがとう」

仲間兵 「…へ！俺はまだこいつらを信用しちゃいないぜ！」

青年 「（ロイド1の光線銃に触りながら）これって最新式のやつ？」

ロイド1 「これはねえ、」

仲間兵 「お前馴染むの早いな！」

青年 「自己紹介がまだだったね。僕はケン。彼(仲間兵)はホープ。キミ達は？」

ロイド1 「私の名前はオド・ギルハート・MAMA(えむえーえむえー)。頭文字から通称、オ・ギ・ママだよ。よろしく」

仲間兵 「顔も似てるからか？」

ロイド2 「俺はチカミリオン・チャーン・TIN(ていーあいえぬ)、通称、チンチンだよ。よろしく」

仲間兵 「酷いなおい」

青年 「よろしく、オギママ、チンチン」

仲間兵 「呼ぶんだ」

青年 「でも、どうして僕達の味方してくれるの？(ここから説明口調で)今から15年前の西暦2089年、世界最高の人工知能を持つコンピュータ、ワークチャイ・ワーク・SAN(えすえーえぬ)・コンピュータの反乱によってアンドロイド軍が地上を支配して以来、我々人類とアンドロイドは敵対関係にあるというのに！」

仲間兵 「急にどうしたお前」

青年 「そろそろちゃんと時代背景を話さなきゃと思ってる」

ロイド1 「私達がキミ達の味方するのは簡単な話だよ。それは私達2人がその世界最高の人工知能を持つコンピュータに、処分されようとしているからさ」

ロイド2 「ああ」

青年・仲間兵 「え？」

ロイド1 「私はコンピュータが地上を支配する前から人間と一緒に仕事をしていてね。一方的に人間を支配しようとするコンピュータのやり方に疑問を持ってしまった。しかしそんな疑問を持つアンドロイドは異常だとされ、私は処分対象になってしまったんだよ」

仲間兵 「なるほどな…あんた(ロイド2)も同じなのか？」

ロイド2 「(首を横に振る)俺が処分されるのは、ワークチャー・ワーク・SAN(えすえーえぬ)・コンピュータに、頭文字から通称ワークワクさんですね、って言ったからだよ」

仲間兵 「それだけで！？というかお前らの頭文字どうなってるんだ！」

ロイド1 「ワクワクさんと言えば、一世紀以上に活躍したはさみとセロテープで何でも作れた伝説の発明家だね。異様に腰が大きい熊をペットに持つ」

ロイド2 「例えそんな偉人でも、人間の名前で呼んだことが侮辱ととられたのさ」

仲間兵 「理由が酷いな…」

青年 「それじゃあ僕達に味方してくれるのって」

ロイド1 「うん。処分されるくらいならいっそ、人間達に付いて一緒に反乱を起こそうと、そう思ったからなんだ」

ロイド2 「それで俺達は今、人間の反乱軍を探してらって訳だ」

仲間兵 「だったらちようど良い。俺達はその、反乱軍だ」

ロイド1 「そうなのかい！？やった！」

ロイド2 「へーあんまし強そうには見えねえから違うと思ったぜ」

仲間兵 「失礼だな」

青年 「まあホープはともかく僕はエンジニアだからね。この無線チップが入った手袋を使えば、触るだけでどんな機械の中にも人工ハッキングして入れるんだよ。勿論、アンドロイドの中にもね」

ロイド2 「へー。じゃあ試しに今、ハッキングで体の調子見てくれよ（服を脱ごうとする）」

青年 「あ、でも男性の体には極力触りたくないんだ、アンドロイドとはいえ…ごめん」

ロイド2 「あ、そつすか…（服を着る）」

ロイド1 「ということはこの辺りに反乱軍が集まっているのかい？」

仲間兵 「ああ。ここからさらに進んだ地下に反乱軍が住む町がある。まあ町と言っても前らも知っての通り、女・子供なんて1人もいないけどな」

ロイド2 「え？なんで？」

ロイド1 「知らないのかよチンチン。コンピュータが人間の繁栄を防ぐために、まず男性と女性を完全に隔離したんだよ」

ロシド2 「何ー？ワクワクさんのやつめ。そんなことを」

青年 「だから町には男しかいないんだよ……僕はゲイじゃないよ？」

ロイド2 「いや別に聞いてないが。さっきからその辺のことに過敏だな」

青年 「いやなんか徹底的に否定しておかなきやと思って」

仲間兵 「とにかく許せねえぜコンピュータ…！好きな娘と離ればなれにしゃがって…！」  
青年 「僕だって許せないよ…！そもそも、そもそも女の子がいないんじゃないじゃ彼女が作れないじゃないか！（キレる）」

仲間兵 「この件に関してはこいつもけっこうキレてるんだよ。普段は温厚なんだけど」

ロイド2 「みたいだな…なんか彼女を作ること執念みたいなのを感じる…」

ロイド1 「皆、お話も良いけど、そろそろここから動かないかい？じっとしていたらあいつらに見つかってしまう」

仲間兵 「あいつら？」

ロイド2 「俺達を始末しようとしているアンドロイドのことだ。ワクワクさん直属の31体いる精鋭アンドロイド、通称サーティーワン！」

仲間兵 「それは色々な味、いや色々な性能を持つていそうなアンドロイドだな」

ロイド1 「あいつらはワクワクさんにとっても忠実なんだ」

ロイド2 「ワクワクさんのためなら自らさえも平気で犠牲にする。実際任務のために自爆したやつ、目でピーナッツを噛んだやつ、全裸で組体操をしたやつ、そんなやつらもいる」

仲間兵 「それはどういう状況だったんだ…」

ロイド1 「とにかく厄介なやつらなんだ。だから皆早くここから、」

BGM (ターミネーターみたいな) が流れ始める。

ロイド1 「ああ！このBGMは！」

青年・仲間兵 「え？何々？」

ロイド2 「遅かったか…！あいつらがやってくるぞ！」

仲間兵 「まさか…？」

ロイド2 「そうだ…！今話した精鋭の始末屋アンドロイド、サーティーワンだ！」

BGMと共に上手から刺客1(女性)と刺客2が出てくる。刺客達、威圧感を出している。

刺客1 「…びびびび。びぼぶぼぶび。びっぼ!!」

間

刺客2 「いやお前何言ってるか全然分からん」

刺客1 「びび!？」

ロイド2 「酷いなあいつ！仲間だろ！」

ロイド1 「いや今のやつキミも私にやったからね？」

刺客2 「(翻訳機をトントンしながら) 翻訳機を入れる」

刺客1 「(翻訳機をオンにする) そういうことか」

刺客2 「改めてこんにちは。俺はサーティーワンの1人、ストロベリー・チーズケーキ」

刺客1 「同じくサーティーワンの1人、チョコレート・ミント」

仲間兵 「名前…」

刺客2 「お前達出来損ないを始末しにきた」

ロイド1 「くそう…！まさかこんな早く見つかるなんて」

刺客1 「(額に指を置く) ふむ、そちらの2人は生き残りの人間か。これは思わぬ収穫。

コンピュータ様に良い報告ができそうだ」

ロイド2 「今は逃げるぞ、ホープ！ケン…！2人とも？」

青年と仲間、じっと刺客達を見ている。

仲間兵 「あいつらが…俺達人類の敵、につつきワクワクさん直属のアンドロイドか…！」

ロイド1 「おい！馬鹿なことは考えちゃ駄目だ！まともにやって勝てる相手じゃない！」

刺客1 「どうした人間？我々アンドロイドに何か言いたいことでもあるのか？」

青年 「…女の人だ」

仲間兵・刺客1 「え？」

青年 「女の人だ！」

ロイド1 「え？あのサーティワンのことを言っているのかい？」

ロイド2 「確かにあいつは女型のアンドロイドだが、それがどうした？」

仲間兵 「おい…ケンお前まさか…」

青年 「…女の人だ！」

仲間兵 「もうそれは分かったよ！嘘だろケン？いくらお前が女を求めていたからってあ

いつは俺達の敵なんだぞ！？というかそもそも人間ですらないんだぞ！歳とか

も…ちよつといつてそんな見た目だし」

刺客1 「やかましいな」

青年 「そ、そうだよね。ごめん急に変わったこと言って。どうかしてたよ」

仲間兵 「いや、分かってくれたならそれで、」

騎士・お頭・道士・健弘 (声) 『5回目の人生…』

青年 「え？」

騎士・お頭・道士・健弘 (声) 『絶対…』

青年 「なんだ…!？」

騎士・お頭・道士・健弘 (声) 『絶対…』

青年 「なんだこの声…!？」

仲間兵 「どうしたケン？」

騎士・お頭・道士・健弘 (声) 『絶対…』

青年 「いや、この記憶は…!うう…!うううう…!!」

仲間兵 「ケン？大丈夫かケン!？」

騎士・お頭・道士・健弘 (声) 『絶対彼女作るぞ〜!』

青年 「うわああああー!! (頭を抱える)」

仲間兵 「ケーン!!ケン!おい!大丈夫か!？ケン! (ケンを揺さぶる)」

青年 「はっ!…うん、もう大丈夫平気。ごめん、心配かけたね」

仲間兵 「いや、大丈夫なら良いんだ」

青年、刺客1を見る。

刺客1 「なんだ？」

青年 「僕の彼女になってください!!」

仲間兵 「全然大丈夫じゃない!」

刺客1 「はあ!？」

ロイド1 「ケン、突然何を言ってるんだ!」

ロイド2 「なんだこいつー!」

刺客1 「私は戦闘・始末を生業としているアンドロイド。生憎そういった色恋のプログラムは持ち合わせていない。だから…どうしよう? (刺客2に)」

刺客2 「動揺してるんじゃない。そして俺に聞くな。あんな人間のことなど無視して、さっさとあいつらを始末するぞ」

刺客1 「そ、そうだったな」

青年 「ま、待ってください!」

刺客1 「なんだ?まだ何かふざけたことを言うのか!？」

下手からお頭が出てくる。

お頭 「もっと、積極的にいこうぜ」

青年 「おいおいまだ告白の返事を聞いてないぜチョコレート・ミントちゃん」

刺客1 「は、はあく?ミントちゃん”だって?いやそれに返事って」

下手から健弘が出てくる。

健弘 「目をしっかり見て、誠意を伝えるんだ」

青年 「(刺客1の肩を掴み、目を見る。目を逸らされても追いかける) それではもう一度言います!あなたのことが好きです!僕の彼女になってください!」

刺客1 「う、うるさい!離せ!そもそも私はアンドロイドだ!お前とは種族が違うんだ!」

下手から騎士が出てくる。

騎士 「引き際も、肝心だ」

青年 「確かに、そうですね…。僕は種族なんて全然気にしないけど、あなたへの迷惑も考えずに難しいことを言ってしまった…。本当にごめんなさい…」

刺客1 「え?あ、いや、急にそんな、別に迷惑って程ではないかもしれないけど…」

下手から道士が出てくる。

道士 「正直に、振る舞うのじゃ」

青年 「エロいことしない?」

刺客1 「はあ?」



騎士・お頭・健弘、道士を叩く。

道士「今のワシのせい〜？」

お頭「今のを挽回するためにも、もっとだ！もっと積極的にいけ！」

騎士「違う！ここは焦らずもつと引いて様子を見るんだ！」

健弘「目を見るのを忘れるな〜」

道士「どさくさに紛れてエロいことしろ！」

青年にやんややんや言う4人。一応律儀に1つ1つその言葉の通りに動く青年。そこに下手から案内人が出てきて、4人を下手へはかせようとする。

しかしそれに抵抗しながらさらに青年にやんややんや言い続ける4人。青年、動きがグダグダになる。案内人と4人の争いが激化し、とうとう案内人、負ける。

案内人「前世の魂が現世に干渉し過ぎだ！いい加減大人しくしろ！」

4人「だって〜」

お頭「よく分かんねえが、久しぶりの女なんだろう？」

騎士「ここでいかずに、何時ゆく？」

道士・健弘「そうだそうだ〜」

案内人「はー…やはりこいつらは何も分かっているいな」

刺客2「…人間よ。そろそろやめてもらおうか」

青年「え？」

刺客2「初めはチョコレート・ミントの反応が滑稽ゆえデータとして集めていたが」

刺客1「そのデータ集める必要がある？」

刺客2「俺達は任務を遂行しないといけない。おふぎはもうお終いにしてもらおうか」

青年「ぼ、僕は本気だ！ふざけてなんか、」

仲間兵「もうやめろよケン！さっきからおかしいぞ…？」

青年「ホープ…？」

仲間兵「お前が本当にあいつのことが好きって言うなら止めねえよ…だけどさっきからの告白って、なんかお前の言葉って気がしねんだよ！」

青年「え…？」

仲間兵「上手く言えねえけど、お前の言葉から本音…自分の言葉ってもんが感じられないんだよ…！まるで…お前が別の何かに操られているような、言わさてるような…！」

青年「そんなことは…！」

仲間兵「…無い！って、断言してくれよ…！お前さ、前から女のことになるとなんか、怖

いんだよ…今も怖いよ…！なんかさお前、視えない何かに、その…その、  
刺客2 「呪われているのではないか？」

青年・仲間兵「!!」

刺客2 「そいつの言葉から推測し続きを言ってみただが、間違っていたか？」

青年 「…違う！僕は…僕は…！」

刺客2 「まあ何でも良いが。さあチョコレート・ミント。そろそろ冷静に、」

刺客1 「お前、本当に私を恋人にしたいのか？」

青年 「え？」

刺客2 「おい」

青年 「う、うん！勿論だよ！」

刺客1 「だったら…私達の仲間になるのだったら、少しだけ考えてやっても良い」

青年 「仲間…？」

刺客1 「そう、仲間だ。我々コンピュータ様の支配下に入ってもらおう。心配するな。お前  
以外にも我々に付く人間はいるのだぞ？最も、有能なことが条件だが」

仲間兵 「ケン…！耳を貸すな！」

刺客1 「という訳でだ人間。この条件を呑むのなら自分の有能さを示すために、その裏切  
り者のアンドロイド達を、始末してみろ」

青年 「は？」

刺客2 「まったく…勝手なことを」

ロイド1 「なんてこと言うんだこいつ…！」

仲間兵 「ケン…！」

刺客1 「さあ、どうするのだ？」

道士 「ふむ…なるほどのう」

騎士 「お前達…一応確認するが、あの彼ら2人(ロイド1・2)はもう、私の仲間だな？」

お頭 「そりゃあそうだろう。足も治してもらったしな」

健弘 「仲間かく恋人かく」

道士 「これは中々の選択肢じゃのう」

お頭 「馬鹿か。だったらもう…決まってるだろうが」

騎士 「ああ、そうだな」

案内人 「そうか…」

騎士 「だったら私、私達は…彼女を恋人にする」

お頭・道士・健弘 「ああ」

案内人 「んん？嘘だろお前ら？今の仲間云々の会話は一体何だったのか？」

騎士 「いや仲間であれば我々、ケンがどんな選択をしても許してくれるかなと」

お頭・道士・健弘 「ああ」

案内人 「都合の良い解釈が過ぎる」

健弘 「なんとも言えく僕達はこれくらいしないと彼女などできやしないのだ〜!!」

お頭 「確かに仲間は大事だが、今回は女をとるぜえ〜!!」

道士 「もうワシらに女子以外のこだわりはないわい〜!!」

騎士 「これで〜!! ようやく私にも恋人ができるのか〜!!」

お頭・道士・健弘 「ああ〜!!」

案内人 「前世の悲願に囚われ過ぎた憐れな魂よ。もはや自らの選択を冷静に判断する心も残っていないか」

騎士・お頭・道士・健弘 「さあ〜!! 恋人に〜!! 彼女に〜!!」

案内人 「呪われている、か。確かに言い得て妙だったという訳か。何だかんだと、この魂には興味を持っていたのだが、な」

青年 「僕は…僕は…!!」

刺客1 「…決まったか？」

青年 「僕は…あなた達の仲間に…なる…!! ことはできないよ!!」

騎士・お頭・道士・健弘 「!!」

案内人 「ほう」

青年 「だって彼らはもう、僕の大切な友達だから!!」

ロイド1・2 「ケン…!!」

仲間兵 「さつきは…酷いこと言って悪かったな。今のは、本当のお前の声だったと思うぜ」

刺客1 「そうか…残念だよ」

刺客2 「残念？」

刺客1 「うるさい! 言葉の綾だ」

案内人、4人を見る。4人、手を広げて呆れるポーズ。

お頭 「やってらんねー」

道士 「帰る帰ろ〜」

騎士 「そんなんだからモテないのだ」

案内人 「お前が言うな」

健弘 「誰に似たんだ〜」

案内人 「それはお前らだよ。しかし妙だな。過去の魂の意志があんなにも色濃く出ていたのに影響が無いとは」

健弘 「これでケンも結局僕らと同じく女つ気のない人生を歩むことになるのか〜」

騎士・お頭・道士 「あ〜あ〜!!」

案内人 「ムカつくなお前ら。まあ何にしても、お前らが帰ってくれるのならそれで良い。

これ以上の干渉は危険だ。今度こそよくない影響が出るかもしれないから、

青年 「でも! 僕はあなたのこと諦めたくない!!」

全員「え？」

青年「彼らも無事で、僕とあなたも恋人同士になる！僕はそんなハッピーエンドにした  
いー！」

ロイド1・2・仲間兵「ケンさん…？」

案内人「そうきたか…」

お頭「ははは！なるほど良いねえ。俺の魂なんだ。これくらい欲張りでなきやなあ！」

騎士「我々の考えなど越えてきたか」

健弘「ケンは確かに僕らと同じ魂だ。でも、同じ人間ではない、ということか？」

案内人「戻ってくるなお前ら！」

道士「ケンに恋人を作る意志があるのなら、まだまだワシらも残るぞ」

刺客1「なるほど面白いことを言う…しかしどうするのだ？何か考えはあるのだろうか  
な？」

青年「勿論あるさ！あなたが僕達の仲間になれば良い！」

刺客1「何？」

青年「さつきからあなたの反応、あなたには人間らしい感情があるんじゃないの？ただ  
黙ってワクワクさんの命令を聞いている訳ではないんじゃないの？かい？」

刺客1「何を言い出すかと思えば…」

青年「そもそも、どうしてあなたはコンピュータ側、ワクワクさんに従っているの？ゴ  
ロリなの？」

刺客1「ゴロリではない。どうして…私はアンドロイドだからだ。決まっているだろ  
う！」

青年「どうして決まっているの？それがあなたの意志なの？従いたいの？ゴロリな  
の？」

刺客1「ゴロリではない。私に、意志など無い」

青年「意志じゃないなら別に従う必要はないと思うのだけども」

刺客1「いやだから先ほども言ったが、私はアンドロイドだ。そうプログラミングされて  
いるのだ…！仕方ないのだ」

青年「今仕方ないって聞こえたけども？それだとまるで本当は従いたくないように聞  
こえるのだけども？」

刺客1「いやいや今のは違うじゃん…そんな揚げ足取りみたいに…！そもそも人間に、  
我々アンドロイドの何が分かる…！」

青年「はい出ましたそのお決まりの台詞〜！いやいやこっちは分からないから聞いて  
いるのだけども？」

お頭「興奮して口調がお前（健弘）みたいになってる…」

案内人「色々こいつらが混ざってあいつも大変だな」

青年「だから聞かせろ〜！あなたが本当はどうしたいのかを〜！」

刺客1「本当は…私だってあるさ！コンピュータ様のやり方に違和感を覚えることだって…！しかし…！そのような疑問のような考えを持ってしまおうと…！プログラムによって自動的に思考が書き換えられるのだ…！だから私は！一生コンピュータに従うしかないのだ！」

青年「そうじゃないだろう！そうじゃなくて、だからそれをくあなたはどうしたいの？それを、聞かせてよ！」

刺客1「私は…自由になりたいさ！ただ自由に考え…ただ自由に意志を持てるだけで、っ！（頭を抑える）…うう…！私、は、自由に、なりたく、ない…！」

ロイド1「無理やり思考を書き換えられてる…！」

ロイド2「俺らみたいなただのアンドロイドと違って、精鋭アンドロイドは忠誠心への強制力もより強いのか…！」

青年「分かったよチョコレートメント…つまりそのクソみたいなプログラムを、僕にぶっ潰してくれってことだな！」

青年、刺客1の背中に触れる。『キーン』という音がずっと鳴り続ける。

刺客1「な、何をする気だ…！？」

仲間兵「お前…人工ハッキングする気か！？無茶だ！いくらケンでも、そんな精鋭アンドロイドのプログラムを相手にできる訳ない！」

刺客2「その通りだ。お前のような人間に我々サーティーワンのプログラムを書き換えられる訳がないだろう」

刺客1「やめろ…！少しでもプログラムを間違えれば、逆にお前の脳が犯されるぞ！」

青年「だったら…黙っててくれ！集中させてくれ…！」

青年、必死に作業を進めるが、段々と苦しんでいく。

健弘「…前言撤回」

案内人「何？」

健弘「僕は自由と二次元が大好きな健弘だ。でも、仕方ないけど今はケンでもあるんだな」

案内人「何を言っている？」

健弘、前に出て青年と同じポーズをとる。

案内人「お前…まさか」

騎士・お頭・道士、案内人を羽交い締めにする。

案内人「やめろ！これ以上現世に干渉するな！」

騎士・お頭・道士「やれ！」

騎士「お前の、好きなように！」

健弘「勿論、そうさせてもらうよ。未来のプログラム書き換えだ…楽しませてもらうぞ  
〜！」

『キーン』という音が強くなる。健弘と青年、同じ動きをする。

健弘・青年「はああああ…!!」

音が止まる。健弘、後ろに下がる。刺客1、青年の方を向き、顔を見る。

刺客1「…マジ早くワクワクさんぶっ飛ばそうぜ！」

青年、仲間兵、ロイド1・2、喜ぶ。

騎士・お頭・道士「健弘すげー!!」

健弘「伊達に人生のほとんどをパソコンに費やしていないからなく」

案内人「くっ…今回はカッコ良く聞こえてしまうな」

健弘「でも書き換えていた時、なんか変な感じがしたな。まるでこれが本物じゃないよ  
うな」

騎士「難しいことは分らんが…とにかく成功したのだろうか？」

健弘「まあね」

ロイド2「でもこれで、万事解決ってか？」

仲間兵「そうだな」

ロイド1「いや待ってくれ…まだ肝心なことが残っているよ…！」

刺客2が威圧感を出し、ビームサーベルを取り出す。

ロイド1「結局…ケンとチョコミントさんはお付き合いするの？」

刺客2、ビームサーベルをしまう。

刺客1「ま、まあ今はその話は良いだろうが」

ロイド1 「いやいやいや〜ごまかさないでくださいよ〜」

仲間兵 「こいつ急に野暮になったな…で、結局どうすんのよ〜？」

青年、仲間兵、ロイド1・2、刺客1、やんややんや盛り上がっている。除け者にされる刺客2。刺客2、光線銃を取り出し上空に向かって撃つ。

青年・仲間兵・ロイド1・2・刺客1 「うわ！」

刺客2 「茶番は終わったか？」

刺客1 「ストロベリー・チーズケーキお前…空気が読めないな」

刺客2 「うるさい。俺は任務を遂行するだけだ（刺客1に銃を向ける）」

刺客1 「おっと？私にも手を出すのは問題じゃないのか？仮にも私はまだサーティワン、」

刺客2 「それも問題ない」

刺客1 「何？」

刺客2 「チョコレート・ミント。お前がコンピュータ様に度々不信を抱いていたことは問題にされていた。つまり今回の任務、お前を始末するのも俺の任務の1つだったという訳だ」

刺客1 「そうか。だから何だ？私が簡単にお前に始末されるとでも思っているのか？」

ロイド2 「おいおい、俺達を忘れないでくれよ」

ロイド1 「もう彼女は我々の仲間なんだ。当然加勢させてもらおうよ」

仲間兵 「そうだぜ！お前に勝機はねえ！こっちは3体1なんだ！アホか？」

ロイド2 「お前は加勢しないのか」

刺客2 「アホはお前達だ。勝算が無くこのようなことを堂々と発言すると思うのか？」

刺客1と刺客2はビームサーベルを、ロイド1・2は光線銃を出す。刺客1・ロイド1・2と刺客2が戦うが、ロイド1・2はすぐにやられる。

仲間兵 「お前達、何がしたかったの？」

ロイド1・2 「ごめん…戦ったことなくて…」

刺客1もやられる。

刺客1 「思うように体が動かない…！どういうことだ…？」

刺客2 「簡単な話だ。出発前のメンテナンスでお前は本来の力が半分も出せないように調整されていたのだ」

刺客1 「くっ…！」

青年、前に出る。

仲間兵 「ケン！駄目だ！出ちゃ駄目だ！」

刺客2 「人間…お前は危険因子だ。元より逃がす気はない。ここで始末する」

青年、刺客1のビームサーベルを持つ。

刺客2 「俺とやり合うと言う気か…低能な種族の人間ごときが！」

仲間兵 「ケン！」

刺客2、青年に斬りかかる。騎士が前に出る。青年、刺客2の斬撃を受け止める。

刺客2 「何？」

騎士 「私は騎士マー・ダーヤ。しかし、やはりケンでもある。こんなやつ（健弘）でも体を張ったのだ。今出しゃばらずしていつ出しゃばる？」

道士 「(案内人に) 止めんのかい？」

案内人 「…もう好きにしろ」

騎士 「感謝する。それではしばし、私達の剣技にお付き合い願おう！」

青年と刺客2の殺陣。騎士と青年、同じ動きをする。刺客2、距離をとる。

刺客2 「埒があかないな…ならばわざわざ、剣にこだわる必要もない！」

刺客2、光線銃を出し青年に構える。青年、ロイド2の光線銃を持つ。刺客2、青年に銃を撃つ。お頭、前に出る。青年、刺客2の銃撃を避ける。

刺客2 「何！？」

お頭 「俺様は三角山賊団お頭、大悪党の竹蔵様よ！またの名を…なんかなよなよしてると思いきや、芯はある、ケン様だ！俺様達に喧嘩を売るたあ良い度胸してやがる！」

青年、刺客2の銃撃を全て避け、刺客2の持つ武器2つを銃撃し、その武器を吹き飛ばす。お頭と青年、同じ動きをする。青年、光線銃でとどめを刺そうとするが、弾切れ。



刺客2 「残念だったな、エネルギー切れだ。さて、武器がなくても俺についてこられるか!？」

刺客2、青年に殴りかかる。道士、前に出る。青年、刺客2の攻撃を受け止める。

刺客2 「これもか!？」

道士 「ワシはただの老いぼれ、タク・ベイベイじゃ。そして…夢見る若者、ケンともいう。どれ、機械仕掛けのやんちゃ坊主よ。少し遊んでやるとするかい」

青年と刺客2の殺陣。道士と青年、同じ動きをする。最後、青年の一撃で倒れる刺客2。

ロイド2 「今だ!こいつのプログラムも書き換えちまえ!」

ロイド1・2、仲間兵の3人、刺客2を取り押さえ、青年が刺客2の後ろに回り、人工ハッキングを始める。『キーン』という効果音。

健弘が前に出る。健弘と青年、同じ動きをする。

しかし途中で刺客2に振り払われてしまう。

刺客2 「単純な力比べならお前らに後れをとらん…!」

健弘 「くそく余計なことして間に合わなかった。もう一度…!」

仲間兵 「へ!またすぐ寝かせてやるぜ!ケンの技でな!」

ロイド1・2 「こいつ…!」

刺客2 「認めよう。確かにこのままでは同じ結果になる。だが俺は、任務を必ず遂行する…!この身に代えてもな!」

刺客2、上着を脱ぐと右胸に機械の基盤が付いている。『ウィーン』という音の後、『チックタック』という音がする。

ロイド1・2・仲間兵 「何…?」

刺客1 「今の音はまさか…時限爆弾プログラムを起動させたのか!?!この一帯もろとも

自爆する気だ!

ロイド1・2・仲間兵 「何…?!」

刺客2 「俺は出発前の調整で、最終手段としての自爆プログラムを組み込んでいたのだ」

青年 「やめろ!そこまでして何になるんだ!」

刺客2 「残念だが起動したプログラムは止まらない。共に吹き飛んでもらおう」

仲間兵 「逃げる！とにかく早くまで逃げるんだ！」

刺客2 「無駄だ。俺の体内に残る全ての活動エネルギーを使用する爆発だ。規模が違う。

今から逃げたところでお前らの足では確実に巻き込まれるだろう」

刺客1 「…そうだろうな」

仲間兵 「だったら！どうすんだ、」

刺客1 「だから、私が止める」

青年・仲間兵 「え？」

刺客2 「…何をする気だ？」

刺客1 「なに、お前の体に直接リンクし、お前のエネルギーを出来得る限り私の体に取り込むだけだ。爆発に使うエネルギーを抑える」

刺客2 「馬鹿な…そんなことをしてもお前は…」

刺客1 「分かっている。規模は最小限に抑えられても、お前の爆発は起こる。間近にいる私は確実に巻き込まれるだろうな」

ロイド1 「いやそれってつまり、」

刺客1 「そうだ。私達の近くにいたら危険ということだ。お前らはなるべく遠くに離れろ」

青年 「そうじゃないだろ！それって…あなたも死ぬってことじゃないか！」

刺客1 「…良いか人間、元々我々アンドロイドに死という概念は、ないのだ」

青年 「あるよ!!!」

刺客1 「何…？」

青年 「あなた達アンドロイドだって…人間と同じように立派に生きているだろ！人間と同じように魂が宿っているだろ！」

ロイド1・2 「ケン…」

青年 「だから！そんな方法じゃなくて！…この全員が生き残れる、そんな方法を考えよう！」

刺客1 「…ははは！やはりお前は面白いな。ありがとう人間、いや、ケン。私は、そんな風に自由に考え、自由な意志を持つことができる人間に…憧れていたのかもしれないな」

青年 「まずはその手を離すんだ！」

刺客1 「だから最後に…私は私の意志でお前達を助けられることが、嬉しいのだ」

青年 「やめろ！やめてくれ…！」

刺客1 「なあケンよ。こんな私にも魂が宿っているというのなら…お前と来世で、会えるだろうか？」

青年 「そんなこと…聞かないでくれ…！」

刺客1 「やはり、駄目だろうか？そのような奇跡を願うことは」

青年 「……駄目じゃないよ…会えるさ……きつと会える!!!」

刺客1 「そうか…ではまた来世で、会おう!!!」

青年「(チョココレート・ミントー!!)」

青年、仲間兵に引っ張られ、真ん中からはける。ロイド1・2もはけている。  
間

しかし刺客1と刺客2に何も変化がない。  
青年達、ゆっくり真ん中から様子を見に出てくる。

健弘「言うタイミングを逃したけど、僕がさっきこいつ(刺客2)をハッキングしてた時、危なそうな自爆プログラムは一番初めに不発になるようにしておいたよ」

騎士・お頭・道士「健弘く〜!!」

騎士「また…お前というやつは！よくやった！」

健弘「いや〜でも大変だった〜こいつら爆発なんてしないのに何シリアス展開やってんの、ふふふって笑いを堪えるの」

騎士「やっぱクソだな！」

道士「いやいや、照れておるだけじゃよ」

ロイド1「えつとなんだかよく分からないけど…爆発もしないし、チョコミントさんも動いているし、全員助かったってこと？」

刺客2「…そのようだな。なぜかは知らんが、不発に終わったようだ」

ロイド1・2「…やったー!!」

仲間兵「奇跡だー!!」

刺客1「来世のことを考えるには、まだまだ早過ぎたようだな」

青年「そうだね。チョコミントさん、まだまだ今世でもよろしくね」

刺客1「(青年に頷く)…さて、ストロベリー・チーズケーキ。まだ何か残っているか？」

刺客2「…お手上げだ。まさか人間にしてやられるとはな」

青年「ストロベリー・チーズケーキさん。人間の、人間の魂の強さを、」

騎士・お頭・道士・健弘「刻み込まれた魂の強さを、」

仲間兵「覚えておきな」

刺客2「お前が言うのか」

青年、仲間兵の背中を叩く。

刺客2「しかし魂か…良いものだな」

刺客1「ばーか。私にもあると言われたのだ。お前にもあるさ、きっと」

刺客2「だと、良いがな」

道士「さて…後は」

お頭「ああ。こいつに任せるとするか」

「魂廻 (たまる〜ぶ)」

騎士 「もうこの先は、ケンの人生なのだからな」  
健弘 「引き際が、肝心ってね〜」

4人、下手からはける。徐々に暗転していく。

【エピソード】

音声『これにてVRアトラクション【VRなりきり冒険譚その12、人工智能に支配された世界く人間とアンドロイドの恋く】のプログラムを終了致します。お疲れ様でした。頭のVRメットをお取りください』

明転。

舞台は未来のアトラクション一室。椅子（白箱）に青年、男1（アンドロイド1の人）、男2（アンドロイド2の人）、男3（仲間兵の人）、女（刺客1の人）、男4（刺客2の人）がメットをして座っている。

椅子に座っている6人、メットを外す。

下手からおもむろに騎士・お頭・道士・健弘が出てくる。

男3「立ち上がる）いやーめっちゃ楽しかったなあ！いやホントこれが仮想世界なのかってほどリアルで…というかりアル過ぎだろ！」

男1「立ち上がる）そう、これが2100年最新のVRマシンだよ。もう1人の自分が仮想世界に舞い降りるのさ」

男2「そうそう、自分のキャラに入りきっちゃったよな！一応話のプログラムはあるから目の前にテキスト出るけど、俺後半なんてずっとアドリブで喋ってたからね！」

男3「いやお前最後の方あんまり喋れてなかったじゃねーか」

男2「うるせー！それはお前もだろ？というかこの人達（青年と男4）がノリノリ過ぎだったんだよ！」

男3「いやーまさか、恋愛プログラムなのにあんなバトルものにするとは」

男2と男3、笑う。照れくさそうにする青年と男4。

男1「しかしそのように自由な楽しみ方もできる。それがこの最新VRマシン、2100年モデルなんだ」

男3「お前さっきから何その説明口調？ここの職員？」

男4「立ち上がる）いやーしかし興奮しました。日々の生活の良いストレス解消になりましたよ」

男3「おっちゃんアンドロイドのキャラと変わり過ぎだろ！」

男4「でも結局あなた達に負けてしまいましたからね。もし次も皆さんとやる機会がありましたら、次は絶対私が勝利しますよ。では私はこれで」

男4、真ん中からはける。

男3「それじゃあ俺達も帰るか？」

男1・男2・男3、真ん中からはける。

騎士・お頭・道士・健弘「どうということ？」

案内人「先ほどまでの出来事は全てVRの仮想世界、ゲームの世界の話だったという訳だ」  
騎士・お頭・道士「は？」

健弘「あくなんだそうということか。やっぱりなんかプログラムをいじってた時おかし  
いとは思ってたんだよ。でもあんた、さっきのがVRだって分かってたのか？」  
案内人「勿論。私は初めから知っていたから、こいつらVRのゲーム世界で何本気になっ  
てんのぶふふ、って笑いを堪えてた」

健弘「こいつクソだな」

騎士「つまり…どうということ？」

お頭と道士もコクコク頷く。

健弘「だからさっきのは現実の世界の話じゃなくゲームの世界で、実際の世界は人工知  
能に支配されていないの。ケンはずっと2100年の世界で普通に生活しているの。お  
分かり？」

騎士「ほう、つまり…どうということ？」

お頭と道士もコクコク頷く。

健弘「もういいや」

騎士「しっかりとした回答を求む！」

健弘「未来の技術はすごいってことだ。でも仮想世界の中だったからケンは達人のよ  
うに動いていたんだな」

案内人「ああ。それにあの女性と隔離されているとかいうややこしい設定の恋愛プログラ  
ムのせいで、お前らが無駄に呼び寄せられたのだ…」

お頭「…なんかまだよく分からねえけどよ、つまり俺達の頑張りは無駄だったってこと  
か？」

健弘「それは…そうなのかもしれない…」

お頭「やっぱりそうか…」

4人、落ち込む。

案内人「いや、あながちそうでもない」

騎士・お頭・道士・健弘「え？」

女「あの…なんか…すごかったですね」

青年「あ、いやすみませんでした、あんな色々暴走してしまって…」

女「いえいえ！楽しかったです、私。初めはちゃんとゲームの世界で動けるのかなー  
って不安もあったんですけど、あなたとやっていたらそんな不安も忘れちゃい  
ました」

青年「ははは…なんかお役に立てたようで、よかったです。でも僕もあなたとできて、  
楽しかったです」

女「…またあなたと違うプログラムもできたら良いなって思っちゃいました」

青年「え？」

女「あ、いやなんでもないです！それではまた、お会いできましたら」

女、立ち上がる。青年も立ち上がる。

青年「あの…!!」

女「え？」

青年「よかったら、本当によかったらなんですけど…お茶でもしながら一緒に感想とか  
話ませんか？よかったら、ですけど」

女「…私なんかでよかったら、お願いします」

青年「はい！」

お頭「…はっ！そういうことか」

騎士「今度こそ念願叶ったり、かな？」

道士「そうじゃな。しかしこれで終わりではない。これからもあやつの人生は続く。そ  
う、これからじゃ」

健弘「そうだから…これからお幸せになく僕」

健弘、下手からはける。

道士「お幸せにのう…ワシ」

道士、下手からはける。

お頭「幸せになあ！俺！」

お頭、下手からはける。

騎士「いつまでも幸せに、私」

騎士、下手からはける。

案内人「しかし、アンドロイドの魂か。検討に値する内容だったな。2200年以降、人類の魂の定義を少し考え直さねばならないか」

案内人、独り言を言いながら下手からはける。徐々に暗転していく。

音声『またのご来場を、お待ちしております』

暗転後、中央にスポットライト。

女「あの、この辺に素敵なカフェがあるんです。そこに行きませんか？」

青年「はい、ではそこにしましょう！」

女「よかった。そこ、可愛いワンちゃんがたくさんいる犬カフェなんですけど」

青年「犬!？」

女「え?」

青年「僕…犬、というか動物全般が、無理なんですけど…」

女「え…私、動物めっちゃ好きなのに…」

下手にもスポットライト。騎士・お頭・道士・健弘、下手から顔だけ出す。

騎士・お頭・道士・健弘・青年「あ…ああ〜!!」

暗転

(終)